慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ソ連共産党の政治局： 一九五七年の政治局と一九七七年の政治局の比較研究
Sub Title	The Soviet politburo : a comparative profile 1957-1977
Author	中沢, 精次郎(Nakazawa, Seijiro)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1978
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.51, No.6 (1978. 6) ,p.1- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19780615-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ソ連共産党の政治局

——一九五七年の政治局と一九七七年の政治局の比較研究——

中沢精次郎

はしがき

ソヴェト政治研究の領域においても、一九六〇年代特にその後半に入つてからは、研究者に方法論的な自覚が強く要求されるようになつた。[1] 分析方法の独自性を意識した研究業績がつぎつぎに公けにされるとともに、方法自体がしばしば主題的に論議され、またそうしたなかでさまざまな方法論上の提案がなされてきた。[2] たとえば、ブラウン（A. H. Brown）によると「将来もつとも有望な分析技法の一つはソヴェトの政治エリートに関する集合的な資料の収集である。それは、政治の指導的なポストにある人々の公的なプロフィールの作成と党機関のような特定の機関の構成員にみられる経歴上のパターンの発見とを可能にする。特に、このパターンの研究は特定の役職や地域の相対的な政治的重要性は無論のことソヴェト政治における私的隷属関係の解明にも興味深い新しい光を投ずると思われる。数量化の可能な資料によるエリート分析はまさにソヴ

ェト研究の成長点である」[3]という。

なるほど、ソヴェトの政治エリートについてはアームストロング（John A. Armstrong）、ホーネット（Grey Hodnett）、ヒュー（Jerry Hough）、ゲーレン（Michael P. Gehlen）、フレーロン（Frederic Fleron）、フランク（Peter Frank）、あるいはブラックウェル（Robert E. Blackwell）などのすぐれた研究[4]がすでに数多くみられる。もちろん、ここではそうした研究を個別に紹介する必要はないのであるが、ミラー（John H. Miller）の共和国党中央委員会の第一書記と第二書記を対象とした論文[5]やヒル（Ronald J. Hill）のモルダヴィアのティラースポリ（Тирасполь）市の政治エリートを扱つた事例研究[6]、あるいはまたリグビー（T. H. Rigby）の『ソ連共産党の党員、一九一七―一九六七年』[7]を忘れているわけではないことを指摘しておきたい。特に、「ソヴェト共産党の社会的構成を体系的に分析した最初の政治学者の一人」[8]ともみられるリグビーは、党の社会的構成ばかりでなく、最近は『フルシチョフ後のソヴェト政府』[9]や『レーニン指導下のソヴェト政府』[10]にも関心を向けているようであるが、一九七二年に、スターリンの政治局とブレジネフの政治局を政治局員のプロフィールを通して比較した興味深い論文[11]を発表している。

周知のように、ブレジネフのソ連共産党中央委員会書記長[12]在任年数は、スターリンのそれ（一九二三年四月――一九五三年三月）にはまだ及ばないが、フルシチョフのそれ（一九五三年九月――一九六四年一〇月）をすでに、第二五回党大会（一九七六年三月）の時点でこえている。のみならず、この党大会では、スターリンの死後には聞かれることのなかつたような書記長讃歌が斉唱された。「平和と人民の幸福のために闘う勇敢な戦士」であるとか「偉大なレーニンの事業の忠実な継承者、現代の卓越した政治家」であるといつたように、討論演説に登壇した各共和国党の第一書記をはじめとして地方、州の第一書記などの党要人計六二名のいずれもが、ブレジネフ書記長を称え、またそれが四、九〇〇名をこす大会代議員の長い拍手によつて飾られた。一九五九年以来ウズベクの党第一書記を勤め、また一九六一年からは政治局員候補を兼ねているランドフ

(Ш. Р. Рашидов) も例外ではない。第二二回党大会（一九六一年）ではフルシチョフ書記長兼首相を「もつとも親しい友人、大切なもつとも愛する教師」[13]と呼んでいた彼は、その一五年後の第二五回党大会では、ブレジネフ書記長を「わが人民と全世界の勤労者の燃えるような愛、共感、そして尊敬を集めた生粋の労働者の息子、人民の息子、共産党の息子」と、あるいはまた「現代のもつとも卓越した政治家、もつとも影響力のある政治家」[14]とも称えている。しかもこの党大会の閉会後間もない五月、ブレジネフはソ連邦最高会議幹部会からソ連邦元帥の称号をおくられ、また彼の生れ故郷であるウクライナのドニィエプロジェルジンスク市ではウクライナ党第一書記シチェルビッキー（В. В. Щербицкий）の司会で書記長の胸像の盛大な除幕式が行われた。さらに、一九七七年の五月には、その前年に金星の元帥星章と元帥任官状をブレジネフに授与したソ連邦最高会議幹部会議長のポドゴルヌイ（Н. В. Подгорный）が政治局員を解任され、六月のソ連邦最高会議ではポドゴルヌイにかわつてブレジネフが幹部会議長に就任し、一〇月の臨時ソ連邦最高会議では新憲法草案に関する報告を行つている。そして、連邦憲法の改正が一九六二年の四月に公けにされ草案起草の委員会が設置されてから一五年を経た一〇月七日に、草案はソ連邦最高会議の連邦・民族合同会議で採択された。したがつて、一九三六年制定の旧連邦憲法が一般にスターリン憲法と呼ばれてきた先例にならつて現行連邦憲法はブレジネフ憲法と呼ばれることになろう。ブレジネフ書記長の威信がここ一、二年の間にかくも急速に高まつてきていることからすると、党の中枢である政治局の構成にもすでになんらかの変化が生じているのではなかろうかと思われる。

ソ連共産党中央委員会政治局（Политическое бюро ЦК КПСС）すなわち一般には政治局（Политбюро）と呼ばれた党中枢機関の歴史は古い。それは、革命直前の一〇月二三日に、蜂起を目的とした党の当面の政治指導のために創設されたが、政治局員の一人であつたトロツキーを議長とする軍事革命委員会が蜂起の指導的役割を果したため、ほとんど機能することなくして廃止された。[15] しかし革命後、ごく少数の構成員からなる最高指導機関の必要性が痛感されて、一九一九年の三月二五

日に、レーニン、トロツキー、スターリン、カーメネフ（Л. Б. Каменев）クレスチンスキー（Н. Н. Крестинский）の五名（他に三名の政治局員候補）からなる政治局が再び設けられ、党の中枢機関として存続してきたが、この間に政治局がその本来の役割を一貫して果してきたというわけではなく、たとえば、一九二〇年代の中頃にあつては「争い合う独裁者たちの主戦場」[16]と化していた。また、フルシチョフによるとスターリンの晩年においては政治局の会議も稀にしか開かれなかつた[17]という。しかし、スターリンの死後にはその本来の役割をとりもどして政策決定機関として機能しているが、最近この機関つまり政治局におけるブレジネフの指導性が盛んに強調され、たとえば、ブレジネフ書記長の「率いる」（во главе）政治局といつたような表現が頻繁にみられる。

そもそも、「書記長の率いる政治局」という表現は、フルシチョフ書記長兼首相が政治局の会議を司会していた当時は無論のこと、一九六四年一〇月一四日フルシチョフにかわつてブレジネフが書記長となつた当初においてはみられなかつた。一九六六年の第二三回党大会で登壇したある代議員[18]が「書記長の率いる政治局」と表現しているが、そうした表現は第二四回党大会ではまつたく使われていない。ところが、第二五回党大会ではブレジネフ個人の政治局における指導的権威の鮮明化を意識した前記のような用法が一般化した。しかも、表現の形式ばかりでなく、ブレジネフ書記長個人の権威の強化が既述したように党の内外において現に進行している。したがつて、寡頭化か独裁化かといつた問題が改めて提起もされようが、まず、本稿ではブレジネフの政治局すなわち一九七七年一二月三一日現在の政治局を、政治局員のプロフィールを通して、過去の政治局と比較検討してみることとする。比較の対象には一九五七年一二月三一日現在の政治局を選んだ。二〇年という区切りのよい時間的な隔たりもさることながら、この政治局は個人跪拝を否定して集団指導の原則の下に発足したフルシチョフの政治局であるからである。

（1）拙稿「ソヴェト研究の課題」（『共産圏問題』第一七巻第五号、一―三三頁）参照。

(2) 最近マイヤー(A. G. Meyer)が方法論上の興味深い提案をしている。Cf., Alfred G. Meyer, "Comparative Politics and Its Discontent: the Study of the U. S. S. R. and East Europe" (Lucian W. Pye ((ed)), *Political Science and Erea Studies, Rivals or Partners?* Bloomington , 1975, pp. 98–130).

(3) A. H. Brown, *Soviet Politics and Political Science* (London, 1974), p. 44.

(4) 注目すべきものとしては下記のような研究がある。John A. Armstrong, *The Soviet Bureaucratic Elite: A Case Study of the Ukrainian Apparatus* (New York, 1959). Grey Hodnett, "The Obkom First Secretaries", *Slavic Review*, vol. XXIV (December 1965), pp. 635–52. Jerry Hough, "The Soviet Elite," Part I, "Groups and Individuals", *Problems of Communism*, vol, XIII, No. I (January–February 1964), pp. 28–35, Part II, "In Whose Hands the Future?," *ibid.* vol. XVI, No. 5 (September–October 1967), pp. 45–52. Michael P. Gehlen, "The Soviet Apparatchiki" (R. Barry Farrell ((ed.)), *Political Leadership in Eastern Europe and the Soviet Union*, Butterworths, 1970, pp. 140–56). Michael P. Gehlen and Michael McBride, "The Soviet Central Committee: An Elite Analysis", *American Political Science Review*, vol. LXII, No. 4 (December 1968), pp. 1232–41. Frederic Fleron, "Representation of Career Types in the Soviet Political Leadership", (R. Barry Farrell ((ed.)), *op. cit.*, pp. 108–39). Peter Frank, "The CPSU Obkom First Secretary: A Profile", *British Journal of Political Seience*, vol. I, No. 2 (April 1971) , pp. 174–90. Robert E, Blackwell Jr, "Career Development in the Soviet Obkom Elite: A Conservative Trend", *Soviet Studies*, vol. XXIV, No. 1 (July 1972), pp. 24–40.

(5) John H. Miller, "Cadres Policy in Nationality Areas–Recruitment of CPSU First and Second Secretaries in Non–Russian Republics of the USSR", *Soviet Studies*, vol. XXIX, No. 1 (January 1977), pp. 3–36.

(6) Ronald J. Hill, *Soviet Political Elites–The Case of Tiraspol* (London, 1977).

(7) T. H. Rigby, *Communist Party Membership in the U. S. S. R.* 1917–1967 (Princeton, 1968).

(8) A. H. Brown, op. cit., p. 44.

(9) T. H. Rigby, "The Soviet Government Since Khrushchev", *Politics*, vol. XII, No. I (May 1977), pp. 5–22.

(10) T. H. Rigby, "The Soviet Government under Lenin" (一九七七年六月三一五日に開催されたオーストラリア・ヨーロッパ史学会における報告)

(11) T. H. Rigby "The Soviet Politburo: A Comparative Profile 1951–71," *Soviet Studies*, vol. XXIV, No . 1 (July 1972), pp. 3–23.

(12) スターリンの死後「書記長」(Генеральный секретарь) にかわって「第一書記」(Первый секретарь) という名称が一九六六年四月の

党規約の改正まで使われていた。したがつて一九五三年九月の中央委員会総会でフルシチョフが第一書記に選ばれてから六六年四月の党規約改正まではフルシチョフは無論のこと彼の後をついだブレジネフも正しくは書記長と呼び得ないわけであるが、便宜上、本橋では書記長と呼ぶことにする。

(13) XXII съезд Коммунистической Партии Советского Союза, стенографический отчет, т. 1, Москва, 1962, с. 306.

(14) "Правда", Февраль 27, 1976, С. 2.

(15) Leonard Schapiro, *The Communist Party of the Soviet Union* (New York, 1971), p. 175.

(16) T. H. Rigby, "The Soviet Politburo: A Compapative Profile 1951-71, *Soviet Studies*, vol. XXIV (July 1972), p. 3.

(17) Bertram D. Wolfe, *Khrushchev and Stalin's Ghost* (London, 1957), p. 240. フルシチョフのいわゆる『秘密演説』については、Bertram D. Wolfe, *Khrushchev and Stalin's Ghost* (London, 1957) に収録されているテキストを利用した。

(18) ある代議員とはサラトフ州ヴォリスキー区党書記フィリノーヴァ（Ю. Д. Филинова）を指す XXIII съезд Коммунистической Партии Сов етского Союза, Москва, 1966, т. 1, с. 462.

一　政治局員の専任ポスト

ソ連共産党の政策決定機関である政治局[1]には、連邦党中央委員会書記局――書記局とは異なつて、政治局専任の構成員というものはいない。政治局員（および政治局員候補）はいずれも、それぞれの専任のポストを党機関かあるいは政府機関に、時にはその他の公共機関においてもつている。もつとも、どのような専任ポストが政治局員たり得る資格をともなつているかについては、その時々の政治局によつて政治局員の数が変わつているために、速答しがたい。政治局が再設置された当時は五名、その後次第に増加して九名ないし一〇名となり、一九五二年一〇月の第一九回党大会時には――より正確にいうと第一九回党大会選出の中央委員会の第一回総会においては、二五名もの政治局員が選出された。スターリンの死後規模は縮小して一〇―一一名となり、その後一四―一五名となつた一時期もあつたが、再び旧に復して一一名程度となつた。しかし、一九七一年の第二四回党大会時に一五名、一九七六年の第二五回党大会時には一六名となつている。要するに、政治局員の選任あるいは解任は中央委員会の決定に委ねられており、その時々の構成員数には増減がある。このように最近の政治局にお

いても構成員数そのものが時々に変わつているので、政治局の構成には、必ず、書記長、連邦閣僚会議議長—首相、連邦最高会議幹部会議長、党統制委員会議長、そして若干名の連邦閣僚会議第一副議長—第一副首相もしくは連邦閣僚会議副議長—副首相と連邦党中央委員会書記—党書記が加わつてはいるものの、政治局員を兼ねる第一副首相や党書記の数は一定していないし、また政治局員を兼ねるその他の専任ポストも時によつて変わる。全連邦労働組合中央評議会議長が政治局員を兼ねていたこともある。[2] したがつて、つぎに一九五七年と一九七七年の政治局員の専任ポストを紹介[3]してみよう。

一九五七年一二月三一日現在の政治局員

アリストフ（А. Б. Аристов）	連邦党中央委員会書記
ベリヤエフ（Н. И. Беляев）	連邦党中央委員会書記・カザフ党中央委員会第一書記
ブレジネフ（Л. И. Брежнев）	連邦党中央委員会書記
ブルガーニン（Н. А. Булганин）	連邦閣僚会議議長
ヴォロシロフ（К. Е. Ворошилов）	連邦最高会議幹部会議長
イグナトフ（Н. Г. Игнатов）	連邦党中央委員会書記
キリチェンコ（А. И. Кириченко）	連邦党中央委員会書記
コズロフ（Ф. Р. Козлов）	ロシア共和国閣僚会議議長
クーシネン（О. В. Куусинен）	連邦党中央委員会書記
ミコヤン（А. И. Микоян）	連邦閣僚会議第一副議長
ムヒトディノフ（Н. А. Мухитдинов）	連邦党中央委員会書記
ススロフ（М. А. Суслов）	連邦党中央委員会書記
フルツェワ（Е. А. Фурцева）	連邦党中央委員会書記
フルシチョフ（Н. С. Хрущев）	連邦党中央委員会書記長
シヴェルニク（Н. М. Шверник）	連邦党中央委員会付属党統制委員会議長

一九七七年一二月三一日現在の政治局員

ブレジネフ（Л. И. Брежнев）　連邦党中央委員会書記長・連邦最高会議幹部会議長
アンドロポフ（Ю. В. Андропов）　連邦国家保安委員会議長
グリシン（В. В. Гришин）　モスクワ市党委員会第一書記
グロムイコ（А. А. Громыко）　連邦外務大臣
キリレンコ（А. П. Кириленко）　連邦党中央委員会書記
コスイギン（А. Н. Косыгин）　連邦閣僚会議議長
クラコフ（Ф. Д. Кулаков）　連邦党中央委員会書記
クナエフ（Д. А. Кунаев）　カザフ党中央委員会第一書記
マズロフ（К. Т. Мазуров）　連邦閣僚会議第一副議長
ペリシェ（А. Я. Пельше）　連邦党中央委員会付属党統制委員会議長
ロマノフ（Г. В. Романов）　レニングラード州党委員会第一書記
ススロフ（М. А. Суслов）　連邦党中央委員会書記
ウスチノフ（Д. Ф. Устинов）　連邦国防大臣
シチェルビツキー（В. В. Щербицкий）　ウクライナ党中央委員会第一書記

一九五七年の政治局と一九七七年の政治局を比較すると、その構成員数の点では前者が一五名そして後者が一四名であるから、両者はまず規模においてはほぼ等しいということになろう。また、専任ポストについてみるといずれにも、書記長、首相、最高会議幹部会議長は無論のこと、第一副首相、党統制委員会議長、若干名の党書記がみられる。さらに、党専任の政治局員が圧倒的多数を占めているという点でも両者は共通しており、この点では、政治局員一一名のうち一〇名が政府専任であつて、党専任の政治局員がわずか四名にすぎなかつた一九五一年（一二月三一日現在）の政治局[4]とは対照的である。しかもまた、スターリン書記長が首相を、マレンコフ（Г. М. Маленков）党書記が副首相を、アンドレエフ（А. А. Андреев）

党統制委員会議長が副首相（とコルホーズ問題委員会議長）をそれぞれ兼任していた一九五一年の政治局あるいはフルシチョフ書記長が首相を兼任していた一九五八年三月以後の政治局に見受けられたような党・政府兼任の政治局員は、一九五七年の政治局にも一九七七年の政治局にもまた見当らない。

しかしながら、政治局員の専任するポストをさらに類別してみると、一九五七年の政治局と一九七七年の政治局には顕著な差異がないわけではないのであつて、まず前者においては書記長を除く党専任の政治局員一〇名のうちの九名が党書記であるが、後者にあつては書記長を除く党専任の政治局員八名のうち党書記は三名にとどまつている。視点をかえていえば、フルシチョフ書記長は当時構成員一一名の書記局から九名の党書記を政治局に引き入れたのに対して、ブレジネフ書記長が政治局に引き入れた党書記は書記局構成員一一名のうちの三名にすぎないが、この三名のいわば中央党書記の外に、ウクライナ、カザフ、モスクワ市およびレニングラード州の党第一書記、つまり計四名の地方党書記が政治局に組み入れられている。したがつて、一九五七年の政治局も一九七七年の政治局もともに数の上では党書記が支配しているとはいえ、この党書記支配が前者にあつては地方党書記の犠牲の上に、後者においては中央党書記の犠牲によつて確保されているところに、第一の差異が認められる。第二の差異は、一九五七年の政治局にも一九七七年の政治局にも首相と第一副首相の外に政府専任の政治局員が加わつてはいるが、後者には、前者にみられるような共和国の首相ではなくて連邦のしかも国防、外務、保安といつた実務担当の閣僚三名が加わつているということである。また第三の差異は、一九七七年の政治局では書記長が連邦最高会議を代表するポストを兼ねているということである。もちろん、ブレジネフ書記長が兼任しているポストは連邦最高会議幹部会議長であつて、かつてのフルシチョフ書記長[5]のように首相を兼任してはいない。また党書記が連邦最高会議幹部会議長を兼ねていた例はないわけでもなく、一九六三年六月ブレジネフ連邦最高会議幹部会議長兼政治局員が党書記に選出され、翌六四年七月まで党書記兼連邦最高会議幹部会議長を勤めていた。

（1）一九五二年一〇月の第一九回党大会で政治局は幹部会Президиум と改称されたが、一九六六年四月の第二三回党大会で政治局という伝統的な名称にかえつた。したがつてその間の政治局は幹部会と呼ぶべきであるが、便宜上、政治局という名称で統一した。なお、共和国レヴェルの党組織ではビューローБюроという名称が使われているが、ウクライナ党にかぎつて政治局と呼ばれている。もちろん、本論でいう政治局はそれを指すものではない。

（2）一九六七年九月から七五年四月まで、シェレピン（А. Н. Шелепин）が兼ねていた。中央評議会議長が政治局員を兼ねた例は一九五二年に政治局が政治局員二五名に拡大された際政治局入りしたクズネツォフ（В. В. Кузнецов）にみられるが、その後はこうした例がない。グリシンの場合は政治局員候補であつた。

（3）紹介は、当時の公式発表の順位による。フルシチョフ時代そしてブレジネフ時代に入つてからもしばらくはロシア語のアルファベット順位によつていた。

（4）一九五一年一二月三一日現在の政治局員とそれぞれの専任ポストはつぎのようである。

スターリン（И. В. Сталин）　連邦党中央委員会書記長・連邦閣僚会議議長
モロトフ（В. М. Молотов）　連邦閣僚会議副議長
マレンコフ（Г. М. Маленков）　連邦党中央委員会書記・連邦閣僚会議副議長
ベリヤ（Л. П. Берия）　連邦閣僚会議副議長
ヴォロシロフ（К. В. Ворошилов）　連邦閣僚会議副議長
ブルガーニン（Н. А. Булганин）　連邦閣僚会議副議長
カガノヴィチ（Л. М. Каганович）　連邦閣僚会議副議長
アンドレエフ（А. А. Андреев）　連邦党中央委員会付属党統制委員会議長・連邦閣僚会議副議長・コルホーズ問題委員会議長
ミコヤン（А. И. Микоян）　連邦閣僚会議副議長
コスイギン（А. Н. Косыгин）　連邦閣僚会議副議長
フルシチョフ（Н. С. Хрущев）　連邦党中央委員会書記・モスクワ州党委員会第一書記

（5）フルシチョフは一九五八年三月二七日から六四年一〇月一四日まで首相を兼任していた。

二　政治局員の生年、出生地、所属民族、出身階層および学歴

フルシチョフとクラコフは同じクールスク州の農村生れではあつても、第一表から明らかであるように、フルシチョフの生れた当時のカリノフカ村では地主階級が、クラコフの生れた当時のフィティシュ村ではソヴェトの官憲が支配していたわけであつて、このような時代的な隔たりが一九五七年の政治局員と一九七七年の政治局員の生年を比較した場合にまず指摘される。すなわち、一九五七年の政治局では全政治局の五分の二に当る六名が成人してから社会主義革命を迎えているのに対して、その二〇年後の政治局ではわずか一名である。[1] いいかえると、一九七七年の政治局員にとつては、革命の体験的な記憶が残つているとしても、それははなはだおぼろげな幼少年時代の記憶でしかない。しかも、そうした記憶もあり得ようはずのない政治局員つまり革命後生れの政治局員が三名ほど数えられる。このような時代的な隔たりとともに、一九一〇年生れのフルツェワは最初のそして今までのところ唯一人の女性の政治局員であつたことをあわせて指摘しておきたい。

つぎに、出生地であるが、それが都市であつたか農村であつたかという点からみると、都市を出生地とした政治局員が増加して、一九七七年の政治局では過半数に達している。クナエフやグリシンが生れたころの一九一三年当時の農村人口は全人口の八二パーセントを占めており、都市人口が農村人口を上廻るようになつたのは一九六一年以後であるという点からすると、一九五七年の政治局では四名、一九七七年の政治局では七名という都市出身の政治局員の数は非常に多いということになろうが、そのことはまた後述する政治局員の出身階層別の構成とも関連している。なおまた、出生地を共和国別に整理してみると、スターリン、ベリヤ（Л. П. Берия）、ミコヤンによつて代表されたグルジアやアルメニアの出身者が消え、かわつてウクライナや白ロシアあるいはウズベクやカザフの出身者の登場が注目を引く。しかし、ロシアの出身者は一九五七年の政治局でも一九七七年の政治局でもやはり圧倒的多数であつて、それぞれに九名が数えられる。もつとも、人口統計に現われた最近の共和国別の人口動態[2]によると、タジク、ウズベク、カザフなどの人口増加率はロシア、ウクライナ、白ロシアのそれよりも遥かに高くなつているので、一九五九年に五六・三パーセントまた一九七〇年には五三・八パーセントであつ

たロシア共和国人口の対ソ連人口比率は次第に低下してやがては五〇パーセントを割るであろうが、共和国別人口と共和国別党員数とは必ずしも平行するわけではないから、成人人口を基にした共和国別の党組織率を試算[3]すると、ロシアのそれは一九六一年で七・八パーセント（全連邦平均が六・六パーセント）、一九七三年では一〇・一パーセント（全連邦平均が八・九パーセント）と相変わらず非常に高く、また共和国別党員数の対全党員比率ではロシアのそれは最近低下してきているとはいえ、一九七七年（一月一日現在）でも六一・七パーセント（ロシア、ウクライナ、白ロシアの三共和国をあわせたそれは八二・七パーセント）と著しく高い[4]。したがつて、党員のこのような地域分布からすると、一九五七年の政治局あるいは一九七七年の政治局におけるロシア出身の政治局員の比率（もしくはロシア、ウクライナ、白ロシアの三共和国出身の政治局員の比率）が異常に高いということにはなるまい。では、政治局員を出生地別ではなく、所属民族（национальность）別に整理した場合にはどうであろうか。

もちろん、所属民族と出生地とは必ずしも結びつかない。同じウクライナ生れではあつてもブレジネフはロシア人であるが、シチェルビツキーはウクライナ人である。ただ、残念ながら、一九五七年の政治局員についてはすべての所属民族を確認する方途[5]がないので、一九五一年（一二月三一日現在）の政治局あるいは一九七一年（一二月三一日現在）の政治局を一九七七年の政治局との比較対象としてみると、一九七七年の政治局には、一九五一年の政治局にみられるようなグルジヤ人、アルメニア人、ユダヤ人は見当らない。かわつて、第一表に明らかなようにウクライナ人や白ロシア人などが見受けられる。一九七一年の政治局には四名（ポドゴルヌイ、シェレスト、ポリヤンスキー、シチェルビツキー）のウクライナ人政治局員と一名（マズロフ）の白ロシア人政治局員が加わつていた。すなわち、一九五一年の政治局ではロシア人政治局員が六四パーセント（スラヴ系民族の政治局員も六四パーセント）であつたが、一九七一年の政治局では五三パーセント（スラヴ系民族の政治局員は八七パーセント）、そして一九七七年の政治局では七一パーセント（スラヴ系民族の政治局員は八六パーセント）を占めており、数の上

での政治局におけるロシア人支配したがつてまたスラヴ系民族の支配は歴然としているが、このように特定の民族にかたよつた政治局員の民族的構成にも党員の民族的構成が反映されていなくもない。ロシア人党員の比率あるいはまたスラヴ系民族党員の比率はそれぞれ徐々に低下してきているとはいえ、今日なお、全党員の六〇・五パーセントをロシア人党員が、あるいはまた八〇・一パーセントをスラヴ系民族党員が占めている[6]からであり、また現実がかくある以上は、ブレジネフ書記長の後継者の所属民族についてはロシア人であることの蓋然性がもつとも高く、ついではロシア人以外のスラヴ系民族であろうというホーネットの予想[7]はまずはずれることはあるまいと思われる。

しかしながら、政治局の構成にあたつても、党員の多民族的構成が意識されているならば、アルタイ系言語のトルコ語を母語とした諸民族――ウズベク人、カザフ人、アゼルバイジャン人、キルギス人、トゥルクメン人、タタール人、バシキール人など――への配慮が当然あつて然るべきであろう。というのは、過去三一年間に対全党員比率では、グルジア人党員もアルメニア人党員もそれぞれ〇・三パーセントほど低下しているが、ウズベク人党員が一・〇パーセント、カザフ人党員が〇・一パーセント、アゼルバイジャン人党員が〇・五パーセントとそれぞれ上昇しており、今日ではこれら三民族党員を合せただけでもその比率は五・四パーセント[8]にも達しているからである。したがつて、トゥルクメン人党員、キルギス人党員、タタール人党員、バシキール人党員、チュヴァシ人党員などを加えた全トルコ語系諸民族党員の比率となると、それは白ロシア人党員の比率（三・六パーセント）よりも遥かに高いものとなり、おそらくはウクライナ人党員のそれにすら近いものとなるのではなかろうかとも推量される。もちろん、トルコ語系民族の党組織率は最近徐々に上昇しており、たとえば一九六一年に六・八パーセントであつたアゼルバイジャン人の党組織率が一二年後の一九七三年には九・八パーセントにも上昇している[9]。しかも、彼等の人口の自然増加率そのものがまた他民族たとえばスラヴ系民族のそれと比較して非常に高くなっていることも見逃せない。一九五九年の人口を一〇〇とした一九七〇年の民族人口の自然増加率は、ロシア人が一一三、ウクライナ人

が一〇九であるのに対してたとえばカザフ人は一四六、ウズベク人は一五三である。このような点からすると、一九七七年の政治局にカザフ人（クナエフ）がみられるのは偶然ではない。一九五七年の政治局のムヒトディノフは彼の経歴などからみると、断定はできないが、ウズベク人ではなかつたかとも思われる。つぎに、政治局員の生立ちにふれてみよう。

政治局員の生れ育つた環境を知る唯一の手掛りは、公けにされている経歴紹介に生年や出生地とならべて記された父兄の職業に関するきわめて類型的な記述であるが、それらすらも欠いている場合がなくもない。[10] ともあれ、公表の資料によると、一九五七年の政治局員もまた一九七七年の政治局員も第一表にみられるようにそのほとんどが経済的にめぐまれていないいわば社会的下層の出身であり、しかもまた労働者・農民の子弟が圧倒的な多数を占めている。もつとも、労働者・農民の家庭に生れ育つたということは党の性格からして望ましいことむしろ誇示されるべきことであるかもしれない。特に、ブレジネフ書記長の下では労働者階級の指導的な役割が強調されてきたこともあつて、現に労働者党員の構成比率もここ一〇年間に三八・一パーセントから四二・〇パーセントへと上昇している。しかし、第二表にみられるように「勤務員およびその他」の党員つまり労働者・農民（コルホーズ員）以外の社会的階層に属する党員の構成比率は、すでに一九四七年には四八・三パーセント、一九五七年には五〇パーセントをこえており、その後幾分低下してはいるものの、それでもなお労働者党員の四二・〇パーセントよりも高い。一九五七年の政治局のように革命前に生れた政治局員が圧倒的な多数を占めているかぎりでは、抑圧された労働者や貧農の子弟であることをあえて誇示することにそれなりの意味もあろうが、ロマノフのような一九二〇年代生れのさらには一九三〇年代生れの政治局員が多数を占めるような政治局ともなれば、政治局員の出身階層もまた変わってくるであろう。少なくとも、革命後に生れた政治局員が貧農の子弟であるということはあり得ない、ないしは許されないはずである。

最後に政治局員の学歴を中心にして、一九五七年の政治局と一九七七年の政治局を比較してみると、この点では非常には

つきりした差異が認められる。一九七七年の政治局には帝政時代の神学校や実科学校（реальное училище）で教育を受けたものは無論のこと、初等教育のみの終了者も見当らない。しかも第三表に現われているように、一九七七年の政治局員は一九五七年の政治局員と比べると、神学校や実科学校で教育を受けたものはいないという意味で等質化しているばかりでなく高学歴化している。すなわち、高等専門学校終了者は六〇パーセントから七九パーセントへと増加している。このような高学歴化とともにまた、専門技術教育の習得者が六名（四〇パーセント）から一二名（八六パーセント）へと倍増していること、しかもその部門は冶金、有色冶金、農業、道路建設、繊維、化学、造船あるいは兵器産業などと多方面にわたつていることも指摘しなければならない。しかし、一九七七年の政治局員のこのような高学歴化もテクノクラート化も、それは一九五七年の政治局員との比較において指摘される特徴であつて、政治局員ならではの特徴とは認め難い。なるほど、全連邦平均では高等専門教育の終了者は一〇才以上の人口一〇〇人に対して、一九五九年では二・三人、一九七〇年では四・二人であるけれども、一般党員（党員候補を含む）のレヴェルでは一九三七年では五・五パーセント、一九七七年現在では二五・一パーセントである（第四表参照）。したがつて、前記したような政治局員の高学歴化は党員レヴェルからみてもきわめて著しいということにもなろうが、今日では、党の下級指導者たとえば区・市・管区レヴェルの党書記でも高等専門教育の終了者が九九・三パーセントを占めており（第五表参照）、州・地方・共和国レヴェルの党書記では九九・五パーセントにも達している（第六表）。また高等専門教育を終えた一般党員の半数以上が専門的な生産技術教育の習得者つまりテクノクラートである現状からすると（第七表参照）、高学歴化・テクノクラート化を一九五七年の政治局員との比較においてみられる一九七七年の政治局員の特徴とみなすことは差支えないが、さほど強調されるべきことではなかろう。そもそも、両者の間には二〇年という大きな時の隔たりがあるからである。学歴と関連してむしろ注目すべき点は、一九五七年の政治局にも一九七七年の政治局にも、初等教育あるいは中等教育の終了後労働者あるいは下級技術者として生活した後に再び学業に就いた政治局員が多数存在するこ

第一表
政治局員の生年，出生地，所属民族，出身階層および学歴

	出生年	出生地	所属民族	父兄の職業
1957年の政治局				
アリストフ	1903	村，アストラハン州		漁夫
ベリヤエフ	1903	村，バシキール自治共和国		
ブレジネフ	1906	ドニィエプロジェルジンスク，ウクライナ	ロシア人	冶金工
ブルガーニン	1895	ニジニイ・ノーヴゴロド	ロシア人	勤務員
ヴォロシロフ	1881	村，ウクライナ	ロシア人	鉄道警守
イグナトフ	1901	村，ヴォルゴグラード州	ロシア人	大工
キリチェンコ	1908	村，ウクライナ		鉄道労働者
コズロフ	1908	村，リヤザン州		貧農
クーシネン	1881	村，フィンランド	フィンランド人	仕立職
ミコヤン	1895	村，アルメニア	アルメニア人	大工
ムヒトディノフ	1917	村，ウズベク		貧農
ススロフ	1902	村，ウリヤーノフスク州	ロシア人	貧農
フルツェワ	1910	町，カリーニン州		紡績工
フルシチョフ	1894	村，クールスク州	ロシア人	農民・坑夫
シヴェルニク	1888	聖ペテルブルグ	ロシア人	労働者
1977年の政治局				
ブレジネフ	1906	ドニィエプロジェルジンスク、ウクライナ	ロシア人	冶金工
アンドロポフ	1914	村，スタヴロポリ地方	ロシア人	鉄道職員
グリシン	1914	セルプホーフ、モスクワ州	ロシア人	労働者
グロムイコ	1909	村，ゴメリスク州	ロシア人	貧農
キリレンコ	1906	町，ヴォロネージ州	ロシア人	職人
コスイギン	1904	聖ペテルブルグ	ロシア人	労働者
クラコフ	1918	村，クールスク州	ロシア人	貧農
クナエフ	1912	アルマ－アタ，カザフ	カザフ人	勤務員
マズロフ	1914	村，白ロシア	白ロシア人	農民
ペリシェ	1899	村，ラトヴィア	ラトヴィア人	農民
ロマノフ	1923	村，ノーヴゴロド州	ロシア人	農民
ススロフ	1902	村，ウリヤーノフスク州	ロシア人	貧農
ウスチノフ	1908	クイブウィシェフ	ロシア人	労働者
シチェルビツキー	1918	町，ウクライナ	ウクライナ人	労働者

第二表　党員の社会的構成（表示は百分率）※

	1947年1月1日	1957年1月1日	1967年1月1日	1977年1月1日
労働者	33.7	32.0	38.1	42.0
農民（コルホーズ員）	18.0	17.3	16.0	13.6
勤務員およびその他	48.3	50.7	45.9	44.4

第三表　政治局員の学歴

最終学歴	1951年	1957年	1971年	1977年
高等技術専門学校卒	2	5	10	9
高等技術専門学校中退	2	1		1
中等技術学校卒	1		2	2

人文科学系高等専門学校卒		4	3	2
神学校または神学アカデミー卒	2	1		
実科学校卒	1	1		
初等学校卒	3	3		
（高等党学校卒）		(2)	(3)	(2)

第四表　党員の学歴（表示は百分率）※

	1927年1月1日	1937年1月1日	1947年1月1日	1957年1月1日	1967年1月1日	1977年1月1日
高等専門教育終了者	0.8	5.5	7.5	11.6	16.5	25.1
高等専門教育未終了者		2.4	2.3	3.6	2.6	2.4
中等教育終了者	9.1	11.5	21.9	22.6	31.5	39.2
中等教育未終了者		11.5	25.2	29.5	26.9	19.7
初等教育終了者	63.0	44.7	34.7	28.0	22.5	13.6
初等教育未終了者	27.1	24.4	8.4	4.7		

第五表　区党委員会，市党委員会および管区党委員会の書記の学歴（表示は百分率）※

	1947年1月1日	1957年1月1日	1967年1月1日	1977年1月1日
高等専門教育終了者	12.7	28.1	91.1	99.3
高等専門教育未終了者	7.2	52.9	6.3	0.6
中等教育終了者	33.4	15.3	2.6	0.1
中等教育未終了者	25.0	3.7		
初等教育終了者	21.7			

第六表　州党委員会，地方党委員会および共和国党中央委員会の書記の学歴（表示は百分率）※

	1947年1月1日	1957年1月1日	1967年1月1日	1977年1月1日
高等専門教育終了者	41.3	86.8	97.6	99.5
高等専門教育未終了者	10.2	6.8	1.4	0.1
中等教育終了者	29.4	5.6	1.0	0.4
中等教育未終了者	9.8	0.8		
初等教育終了者	9.3			

第七表　高等専門教育終了の党員の専門別構成（表示は百分率）※

	1927年1月1日	1947年1月1日	1967年1月1日	1977年1月1日
技師	7.8	40.1	37.8	43.0
農業技師，獣医師，畜産技師およびその他の農業専門家	6.8	6.3	7.7	7.8
医師	17.4	11.2	6.9	5.3
教員		20.6	25.5	22.6
経済専門家	11.3	5.4	5.4	6.3
その他の専門家	56.7	16.4	16,7	15.0

※См., “КПСС в цифрах”, Партийная жизнь, 1977, № 21, с. 20-43.

と、このような過程を経て高等専門教育を終えたものは一九五七年の政治局では高等専門教育終了者九名のうち七名を、また一九七七年の政治局では一一名のうち八名を数えること、しかも彼等はクーシネン、スロフ、ペリシェを除くといずれも主として一九三〇年代にテクノクラートとしての高等専門教育を受けていることである。革命によつて生れた新体制の下での実生活を体験した後に高等専門学校に入学した彼等一人一人の動機はもちろん知るよしもないが、彼等の多くが一九三五年一二月に撤廃された特定階層の出身の子弟を差別する高等専門学校入学制限令の実は恩恵者でもあつたであろうことは想像に難くはない。ともあれ、一九七七年の政治局では全政治局員がソヴェト体制の下で、しかもその大多数はテクノクラートとしての高等教育を受けており、このような点からしてもまた、一九五七年の政治局には「革命の父」も残つていたが、一九七七年の政治局は「革命の子等」によつて構成されているということになる。

（1）本稿で使用した政治局員の経歴に関する資料は主として左記のような文献によつている。Большая советская энциклопедия の第二版と第三版（ただし、第二七巻以下は未刊行）、БСЭ の Ежегодник (1957–), Энциклопедический словарь, в двух томах, Москва, 1963–4, Советская историческая энциклопедия, т. 1–16, 1961–76, Депутаты Верховного Совета СССР (седьмой созыв, Москва, 1966, восьмой созыв, Москва, 1970). なお、その時々における現職の確認あるいはその在職年数の算出には、The Institute for the Study of the USSR (Munich) の編集する *Party and Government Officials of the Soviet Union* 1917–1967 (Metuchen, New Jersey, 1969), と Grey Hodnett and Val Ogareff (eds.), *Leaders of the Soviet Republics* 1955–1972 (Canberra, 1973) を参照した。

（2）人口統計に関しては、主として、ЦСУ СССР, Итоги всесоюзной переписи населения 1970 года (Москва, 1972–3, т. 1–7) による。

（3）拙稿「ソ連共産党、その構成員の民族的組成」（『法学研究』第四八巻、第七号）参照。

（4）過去三一年間に各共和国の党員数（党員候補を含む）は左記の「共和国別党員数」にみられるように増加している。なお、ロシア共和国の党員数はこの共和国には共和国単位の党組織がないので、公表されていない。したがつて逆算的に算出した党員数である。また括弧内の数字は対全党員比率であつて、いずれも『党生活』誌の“КПСС в цифрах”(Партийная жизнь, 1965, № 10, с. 9, 1973, № 14, с. 11, 1977, № 21, с. 22) によつている。

（5）『ソ連邦最高会議代議員録』（Депутаты Верховного Совета СССР）には連邦最高会議を構成する連邦会議と民族会議の代議員の所属民族

共和国別党員数

	1946年1月1日		1961年1月1日		1977年1月1日	
全党員数	5,510,862	(100.0)	9,275,826	(100.0)	15,994,476	(100.0)
ロシア	4,535,554	(82.3)	6,257,849	(67.5)	10,022,908	(62.7)
ウクライナ	320,307	(5.8)	1,370,997	(14.8)	2,685,902	(16.8)
白ロシア	48,213	(0.9)	225,541	(3.6)	524,348	(3.3)
ウズベク	96,981	(1.8)	224,519	(3.6)	502,690	(3.1)
カザフ	148,612	(2.7)	345,115	(5.5)	672,649	(4.2)
グルジア	121.321	(2.2)	216,866	(3.5)	324,571	(2.0)
アゼルバイジャン	85,571	(1.6)	153,221	(1.7)	296,169	(1.9)
リトワニア	8,060	(0.1)	60,551	(0.7)	150,826	(0.9)
モルダヴィア	10,846	(0.2)	59,908	(0.6)	141,831	(0.9)
ラトヴィア	10,987	(0.2)	72,519	(0.8)	146,930	(0.9)
キルギス	28,745	(0.5)	65,866	(0.7)	111,742	(0.7)
タジク	19,645	(0.4)	52,014	(0.6)	98,953	(0.6)
アルメニア	45,379	(0.8)	85,062	(0.9)	147,460	(0.9)
トゥルクメン	23,502	(0.4)	47,950	(0.5)	80,490	(0.5)
エストニア	47,139	(0.1)	37,848	(0.4)	87,007	(0.5)

民族別党員数

	1946年1月1日		1961年7月1日		1977年1月1日	
全党員数	5,513,649	(100.0)	9,626,700	(100.0)	15,994,476	(100.0)
ロシア人	3,736,165	(67.8)	6,116,700	(63.5)	9,679,129	(60.5)
ウクライナ人	667,481	(12.1)	1,412,200	(14.7)	2,561,818	(16.0)
白ロシア人	114,799	(2.1)	287,000	(3.0)	580,833	(3.6)
ウズベク人	61,467	(1.1)	142,700	(1.5)	333,907	(2.1)
カザフ人	92,354	(1.7)	149,200	(1.5)	292,936	(1.8)
グルジア人	107,910	(2.0)	170,400	(1.8)	265,625	(1.7)
アゼルバイジャン人	55,448	(1.0)	106,100	(1.1)	241,677	(1.5)
リトワニア人	3,704	(0.1)	42,800	(0.4)	110,934	(0.7)
モルダヴィア人	2,913	(0.1)	26,700	(0.3)	72,331	(0.5)
ラトヴィア人	8,408	(0.1)	33,900	(0.4)	66,402	(0.4)
キルギス人	14,039	(0.3)	27,300	(0.3)	51,112	(0.3)
タジク人	13,757	(0.2)	32,700	(0.3)	65,477	(0.4)
アルメニア人	100,449	(1.8)	161,200	(1.7)	239,460	(1.5)
トゥルクメン人	12,675	(0.2)	27,300	(0.3)	50,269	(0.3)
エストニア人	7,976	(0.1)	24,400	(0.3)	50,984	(0.3)
その他の諸民族	514,104	(9.3)	866,100	(9.0)	1,331,582	(8.4)

が記されている。中央委員会の委員あるいは委員候補ともなると両院のいずれかの代議員に選ばれているので、この『代議員録』は貴重な資料であるが、第六回（一九六二年）選出の『代議員録』およびそれ以前の『代議員録』を利用することができなかつた。

（6）この三一年間における民族別党員数（党員候補を含む）の増加は前記の「民族別党員数」によつて示されよう。しかし、一五のいわゆる共和国民族以外の民族の党員数については、それを個別に知る手掛りはない。括弧内の数字は対全党員比率であり、また資料はすべて『党生活』誌の“КПСС в цифрах”（Партийная жизнь, 1962, № 1, с. 49, 1973, № 14, с. 18, 1977, № 21, с. 31 によつている。

（7）Grey Hodnett, “Succession Contingencies in the Soviet Union”, *Problems of Communism*. vol. XXIV, No. 2 (March-April 1975), p. 16.

（8）註（6）の「民族別党員数」参照。

（9）拙稿、前掲論文参照。

（10）たとえば、ペリヤエフの経歴についてはБСЭ（второе издание, т. 58, с. 36）に比較的詳細に記されているが、第一表にみられるように父兄の職業についてはまつたくふれられていない。

三　政治局員の党歴

経歴特に党歴の整理には、なによりもまず入党の時点を確かめなければなるまい。しかし、入党がたまたま同年であれば、その後の党歴も似通つてくるというわけでは無論ない。たとえば、ミコヤンとペリシェを比較してみよう。

一八九五年一一月二五日アルメニアのチフリス県サナイン村に生れたミコヤンはトビリシの神学校を終えてエチミアジンの神学アカデミーの第一学年に入学したが、一九一五年に二〇才で入党し、トビリシやバクーで党活動に従事した。一〇月革命後はデニキン反革命勢力との闘争を指導し、一九一九年一〇月コーカサス地方党委員会の委任を受けてモスクワに上り、バクーと外コーカサスにおける党再建の問題を取り上げた政治局の会議や組織局の会議に出席している。一時帰郷して党活動を指導したが、一九二〇年一〇月ニジニイ・ノーヴゴロド県（現在のゴーリキー州）の党委員会宣伝部長、ついでこの党委員会のビューロー員、党書記となり、一九二二年から二四年までロストフ・ナ・ドンの中央委員会東南地方ビューロー

書記を勤めた。この間の第一一回党大会（一九二二年四月）で中央委員会の委員候補に、ついで第一二回党大会（一九二三年四月）で委員に選出された。その後、北コーカサス地方党委員会書記となり、一九二六年に商業人民委員（Нарком внешной и внутренной торговли СССР）、三〇年には調達人民委員（Нарком снабжения СССР）となり、三四年から三八年にかけては食品工業人民委員（Нарком пищевой промышленности СССР）を勤めている。また一九二六年七月政治局員候補に、ついで三五年二月政治局員に選出されその後政治局員を兼ねてきた。すなわち、ミコヤンは入党後八年で中央委員会の委員となり、また、その一二年後には政治局員となつている。

一八九九年二月七日つまりミコヤンに四年ほど遅れてラトヴィアのリガに近いバウスク区の農村に生れたペリシェはリガの労働者であつた一九一五年に一六才で入党、ヴィテブスク、ハリコフ、ペトログラードなどで党の宣伝煽動活動を続けていたが、一七年の二月革命に参加し、七月の第六回党大会にはアルハンゲリスクの党組織を代表して出席している。一九一八年モスクワの中央委員会に勤務し、一九年ラトヴィアにおけるソヴェト政権樹立に参加、その後二九年まで赤軍と海軍において党の政治教育活動に従事した。一九三一年モスクワの赤色教授養成専門学校を卒業後、同校の歴史学専攻生となり、内務人民委員会付属の教育機関で党史を教授していたが、三三年からはカザフのソフホーズの政治部長を勤めていた。一九三七年モスクワに帰えつて教育活動にたずさわつていたが、四一年三月にラトヴィア党中央委員会書記に就任、宣伝活動を担当するとともに、ラトヴィアの党およびソヴェトの幹部要員の養成に当つた。一九五九年一一月ラトヴィアの党第一書記に昇進し、六一年一〇月の第二二回党大会で中央委員に選出され、六六年四月の第二三回党大会では党統制委員会議長に選ばれた。またこの時に政治局員にも選ばれている。したがつて、入党後中央委員会委員となるまでに四六年を、政治局員となるまでには五一年を要したことになる。

このように、ミコヤンとペリシェとはそれぞれの出生地がロシア帝国の南と北にわかれていたとはいえ、いずれも少数民

族の一員としてほぼ同時代に生れ、同年に入党し、そして同じように党の非合法活動に献身して革命を迎え、またそれぞれの郷土におけるソヴェト政権の樹立に尽しているが、その後の党歴ないしは指導者歴には著しい差異がみられる。政治局員となるまでに費やされた年月の長短ばかりではない。ミコヤンは地方の党書記から連邦政府の閣僚に登用された後に政治局入りしているが、ペリシェは地方の党第一書記から党中央の党統制委員会議長に抜擢されて政治局入りした。したがつて、政治局員の多様な党歴の比較には、政治局員というエリートのなかのエリートとなるまでに必ず経なければならない共通の階梯があれば、まずそれこそが貴重な時間的指標として利用されるべきであろう。このような指標としては、ミコヤンやペリシェのすでに紹介した党歴に明らかなように、中央委員会入りの時点と政治局入りの時点が挙げられる。したがつて、まず入党の時点について個々の政治局員にあたつてみよう。

一九五七年の政治局つまり革命四〇周年記念日を迎えて間もない政治局には、第八表にみられるように、社会主義革命前の入党者が五名（ヴォロシロフ、クーシネン、シヴェルニク、ミコヤン、ブルガーニン）ほどみられるが、革命六〇周年記念日を祝つた政治局にもいわゆるオールド・ボリシェヴィストが一名（ペリシェ）いる。

しかし、一九五七年の政治局では全局員の三分の二にあたる一〇名がレーニン時代の入党者であるが、一九七七年の政治局では前記のペリシェとモスクワの大学予備校（рабфак）在学中の一九二一年に入党したススロフを除く一二名がスターリン時代の入党者である。個別にいえば、トロツキーが政治局員を解任された翌年つまり彼が党からも追われたその年にシベリアの消費協同組合組織で働いていたコスイギンとゴーリキー州の製紙コンビナートで組立て工をしていたウスチノフが、その四年ほど後にはドニィエプロジェルジンスク冶金専門学校在学中のブレジネフ、ルビンスク航空専門学校在学中のキリレンコ、ミンスク経済専門学校在学中のグロムイコがそれぞれ入党しており、また国際的な緊張が極度に高まつてきた一九三九年には、モスクワ非鉄金属専門学校を終えてアルタイ・ポリメタル・コンビナートの副主任技師をしていたクナエフ、赤

軍に勤務中のグリシン、ヤロスラフ州のコムソモール第一書記のアンドロポフが、四〇年にはペンザ州の甜菜コンビナートの農業技師クラコフとゴメリスク市のコムソモール書記マズロフが、さらに一年ほど遅れてドニィエプロペトロフスク化学工業専門学校在学中（もしくは赤軍に勤務中）のシチェルビツキーが、そして四四年に赤軍に勤務中のロマノフがそれぞれ入党している。したがつて、高等専門学校在学中の入党者が四名もいるということにあるいは注目されようが、一九五七年の政治局にもススロフとブレジネフの外にクーシネンがヘルシンキ大学の歴史哲学部在学中に入党している。では、コムソモールの指導者であつた当時の入党者についてはどうか。一九五七年の政治局ではアリストフがアストラハンで郡か区のコムソモール書記を勤めていた一九二一年に、またこの年にはバシキールのビルスク郡のコムソモール書記かウヒームスク県のコムソモール委員会委員であつたベリヤエフも入党しており、リヤザン州カシモフの「赤色」紡績工場のコムソモール工場委員会書記のコズロフが二六年に、その四年後にはクールスク州コレネヴォ区のコムソモール書記フルツェワが入党している。したがつて、コムソモールの指導者であつた当時の入党者は一九五七年の政治局の四名に対して一九七七年の政治局では二名であるけれども、このような数的な差異は、高等専門学校在学中の入党者の場合と同様、さして意味をもつてはいない。ついで、一九五七年の政治局の紹介を終えていない革命後の入党者を取り上げると、まずフルシチョフであるが、彼は土地の分配にあずかるために戦線を離れて帰郷していた当時か赤軍に入隊後に、イグナトフは赤軍内の統合国家政治保安部（Объединенное государственное политическое управление）の機関員をしていた当時、キリチェンコはカザフの国営農場の主任技師か部長を勤めていた時代に、ムヒトディノフは全連邦協同組合専門学校（通信制）を終えて赤軍入隊後に、それぞれ入党している。

以上、一九五七年の政治局と一九七七年の政治局の革命後に入党した政治局員を紹介したが、彼等の入党当時の社会的身分や職業あるいはまた社会的な地位や活動状況については、一九五七年の政治局と一九七七年の政治局とを特に区別し得るよ

うな差異を認めることは困難である。革命後の入党者にかぎつていえば、入党時の平均年齢も一九五七年の政治局では二二―二三才、一九七七年の政治局では幾分若くなつて二一―二二才である。しかしながら、入党当時の時代的背景へと視角を拡大してみると、明白な差異が認められる。すなわち、革命前の入党者の多少もさることながら、一九五七年の政治局では一名を除く他の全政治局員がキーロフ事件以前の入党者であるのに対して、一九七七年の政治局では全政治局員の半数がキーロフ事件以後の入党者である。

一九三四年一二月一日、レニングラードのスモールニイで、当時政治局員と組織局員を兼ねていた党書記のキーロフ（С. М. Киров）が暗殺された。スターリンの『党史』ではキーロフの殺害はトロツキー・ブハーリン一味の仕業であると断定されてきたが、フルシチョフによると、犯人は「キーロフの身辺を護衛する役目の人たちのうちの誰かから幇助されたと疑うべき根拠がある」[2]という。つまり、この事件は外ならぬスターリンの手で仕組まれたのではないかという疑惑があからさまに語られているわけであるが、ともあれ、この事件発生の直後にいわゆるキーロフ法が公布され、反逆・テロ行為の準備あるいは実行のとがによつて告発された者に対する速かな決審と死刑判決についてはその即刻の執行が関係機関に指令され、最高ソヴェト中央執行委員会幹部会に対しては上訴の受理が禁止された。その結果、「多くの捏造裁判事件で被告たちはテロ行為を『準備』した罪を問われた。そのため、被告たちが法廷で彼等の『自白』が暴力によつてなされたものであると述べ、寸分の隙もなく無実を証明した時でさえ、事件を再審査する余地がなかつた」[3]のであつて、『秘密演説』が明らかにしたところによると、一九三四年二月の第一七回党大会で選出された中央委員会の委員と委員候補の総数一三九名のうち九八名が一九三七年から三八年にかけて逮捕銃殺され、この党大会に出席した代議員一九六六名のうちの一一〇八名が反革命的犯罪のかどで逮捕された[4]という。もちろん、粛清を免れた委員と委員候補の四一名のなかには、事件当時就任していた役職の名を付して記すと、ヴォロシロフ国防人民委員、ミコヤン供給人民委員、シヴェルニク全連邦労働組合中央評議会第一書記、フルシ

チョフ・モスクワ市党第一書記兼モスクワ州党第二書記、ブルガーニン・モスクワ市ソヴェト執行委員会議長の計五名が入つているわけであるが、一九七七年の政治局には、生き残りの四一名のなかに入つているものは一人もいない。より正確にいえば、事件当時委員あるいは委員候補であつたものは一人もいないということである。では、キーロフ事件当時すでに党員であつた一九七七年の政治局員七名はそれぞれどのような地位にあつたか。特に、血の粛清がその視模をもつとも拡大した一九三六年から三九年にかけての時期に彼等はどのような組織あるいは分野でどのような活動をしていたのであろうか。

まず、ペリシェであるが、彼はキーロフ事件当時カザフのソフホーズで政治部長をしており、一九三七年にモスクワに帰えつて教育活動に従事していたが、四一年の三月ラトヴィアの党書記に登用されている。事件当時は党中央統制委員会（Центральная контрольная комиссия ВКП(б)）か労農監督人民委員部（Народный комиссариат рабоче-крестьянской инспекции）に勤務していたスロフは三六年に連邦人民委員会議付属ソヴェト統制委員会（Комиссия советского контроля при СНК СССР）に移り、翌三七年にはロストフ州の党委員会付属機関の部長ついで党書記、そして三九年にスタヴロポリ地方党第一書記となつた。一九三四年にレニングラードの軍技術専門学校を卒業して、科学研究所の技師を勤めていたウスチノフは三七年にモスクワの「ボリシェヴィキ」兵器工場の設計技師にそして三八年には同工場の工場長となり、四一年に兵器人民委員（Нарком вооружения СССР）に就任している。他の四名は事件当時いずれも在学中であつて、そのうちの一人であるコスイギンはレニングラードのキーロフ名称繊維専門学校を三五年に卒業、同市の「ジェリヤーボフ」織物工場の職長、ついで職場長となり、三七年に「大一〇月革命」紡績工場長に、三八年にはレニングラード州の党委員会の工業・運輸部副部長となり、またこの年に選ばれてレニングラード市のソヴェト執行委員会議長——市長を勤めたが、翌三九年一月繊維工業人民委員（Нарком текстильной промышленности СССР）に抜擢され、四〇年四月には人民委員会議副議長となつており、ブレジネフはドニィェプロジェルジンスクの冶金専門学校を三五年に卒業して同市の冶金工場の技師を、ついで職業技

術学校（техникум）の校長を勤めたが、三七年五月ドニィェプロジェルジンスク市ソヴェト執行委員会副議長に選ばれ、三八年五月ドニィェプロペトロフスク州党委員会付属機関の部長に、翌三九年二月には党書記となつている。キリレンコはルビンスク航空専門学校を一九三六年に終え航空機製作工場の設計技師を勤めていたが、三八年にザポロージェ州のヴォロシロフ区党委員会の第二書記となり、翌三九年にザポロージェ州党委員会の第二書記に昇進しており、グロムイコは三四年にミンスク農業専門学校を卒業、三六年にはモスクワの全連邦農業経済研究所の修士準備科を終えて連邦経済科学アカデミーで研究活動を続けていたが、三九年に外務省の米国部長に就任している。それでは、一九五七年の政治局のキーロフ事件当時すでに党員であつた政治局員はどうであつたか。もつとも、この場合は一九五七年の政治局には革命前にあるいはまた革命直後に入党した政治局員は事件当時すでに中央委員会の委員もしくは委員候補となつているので、彼等とクーシネンを除いたキーロフ事件以前の入党者、つまり一九二一―三四年の間に入党している八名の政治局員が観察の対象となる。

まず、一九三二年にレーニングラード冶金専門学校を卒業したアリストフは、レニングラードの「ツエントロリット」工場で職長、技師を勤め、三四年から三九年までは、レニングラードのカリーニン名称工業専門学校やスヴェルドロフのキーロフ名称ウラル工業専門学校で研究教育活動に従事、この間一時党の宣伝活動にたずさわつたが、三九年からは党とソヴェトの指導にあたり、四〇年にスヴェルドロフ州の党書記となつており、ベリヤエフはモスクワのプレハノフ名称国民経済大学を一九二五年に卒業、西シベリヤのオムスク、トムスク、ノヴォシビルスクの各地で農業協同組合の指導活動にたずさわつていたが、四〇年にノヴォシビルスク州の党書記にその後ノヴォシビルスク州ソヴェト執行委員会第一副議長に就任している。一九三四年に中央委員会付属のマルクス・レーニン主義学校（курсы）を終えたイグナトフは、レニングラードの「ゴズナク」製紙工場の党委員会書記を勤めていたが、三七年にレニングラード市レーニン区の党書記、三八年クイブィシ

ェフ州の党第二書記についで党第一書記となり、四〇年にはオリョール州の党第一書記となつており、三六年にカリーニン名称レニングラード工業専門学校を卒業して、イジェフスク冶金工場の技師、分塊圧延機主任を勤めていたコズロフは三九年に同工場の党委員会書記、中央委員会党オルグとなり、ついで四〇年イジェフスク市党書記となつた。また、キリチェンコは一九三六年にアゾフ・チェルノモールスク社会主義農業技術・機械専門学校卒業後スウム州のアフトゥルカ市の農業機械技術学校の学科主任や教師を勤めていたが、三八年三月ウクライナ党中央委員会付属機関のインストラクター、課長ついで部長となり、四一年二月にはウクライナの党書記に就任しており、フルツェワは、三五年にレニングラードの民間航空専門学校卒業後アエロフロート航空技術学校の政治部長補佐を、三六年にはコムソモール中央委員会のインストラクターを勤めたが、三七年モスクワ化学工業専門学校在学中同校の党組織の書記となり、四二年同校卒業後にモスクワ市フルンゼ区の党書記となつている。ススロフとブレジネフについてはすでに紹介を終つている。

すなわち、キーロフ事件以前につまり一九二一―三一年の間に入党した一九五七年の政治局の八名と一九七七年の政治局の七名（ただし、革命前入党者のペリシェを含む）の計一五名の政治局員の一九三〇年代後半当時の経歴をみると、そこに幾つかの共通点が見受けられよう。彼等の多くは、前述したように事件当時は高等専門学校在学中かあるいは卒業直後であつた。事件当時の彼等の平均年齢でも、一九五七年の政治局では二八才前後、一九七七年の政治局では二九才前後と非常に接近している。しかし、まず指摘しなければならない第一の点は、彼等全員が第一七回党大会当時にあつては中央委員会の委員候補たり得るような地位からも実はほど遠いところにあつたということである。彼等の当時の経歴からすると、記録がないので断定はできないが、第一七回党大会代議員であつたものすらほとんどなかつたのではないかと思われる。ところが、フルシチョフの言葉をかりていえば「大量弾圧が恐るべき規模に達した」一九三七、八年ごろから四〇年代のはじめにかけて、既述したように教師や技師あるいは工場長といつた職を辞して党機関員（アパラチキ）や官僚の途を選び、党あるいは政府の中堅的な

ポストもしくはそれ以上のレヴェルのポストを獲得している。したがつて、第二の点としては、特定の一時期に彼等はいずれも中央委員会の委員候補もしくは委員たり得るような地位へと一挙に接近しているということが指摘されなければならない。それでは、なに故にこのように急速な立身出世が可能であつたのか。もちろん、個々人の器量や才幹によるところが少なくはなかつたであろう。学校教育にたずさわつていたアリストフが一九三九年に党・ソヴェトの指導にあたつていてその翌年には三七才で、スヴェルドロフ州の党書記に登用されているが、党勢ないし党組織の規模ではゴーリキー州、クラスノダール地方あるいはアゼルバイジャン共和国のそれにすらも匹敵[5]するようなこの州の当時の党第一書記について、フルシチョフの『秘密演説』はつぎのような事実を伝えている。

すなわち、フルシチョフによると、「地方で行われた事件の捏造は、さらに広範囲にわたつていた」のであつて、「内務人民委員部のスヴェルドロフ州本部は、いわゆる『ウラル蜂起本部』――右翼、トロツキー主義者、社会革命党、教会指導者たちのブロックの機関――を『発見』した。その首領は全連邦共産党（ボリシェヴィキ）中央委員会委員で、スヴェルドロフ州党委員会書記、一九一四年以来の党員であつたカバーコフということになつていた。当時の捜査資料によると、ほとんど全部の地方、州、共和国には『右翼、トロツキー主義者のスパイ、テロ、破壊工作組織および本部』が存在したことになつており、こうした組織の首領は大抵の場合――どうしたわけか――州党委員会または共和国党中央委員会の第一書記であつた[6]」という。一八九一年生れのオールド・ボリシェヴィストのカバーコフ（И. Д. Кабаков）は一九一八年末にヴォロネージ・ソヴェト議長を、二二年にヤロスラフ県党書記、二四年にトウリスク県党第一書記、二八年にはウラル州党統制委員会議長となり、二九年からはウラル州党第一書記を、そして三四年からはスヴェルドロフ州党第一書記を勤めていたが、前記したように反革命の罪を問われて三七年の一〇月に処刑された。無論、この州の党組織の犠牲者がカバーコフ一人にとどまつていたはずはない。『秘密演説』が暗に語つているように、共謀や連座の罪でこの州の党幹部の多数が粛清され、その結

果組織の上部には人事の大きな空白が生じたものと思われる。このような空白を緊急にうめるには、多数の新人を、順次に登用抜擢する以外にどのようなてだてがあろうか。すなわち、一九二一―三一年の間に入党した政治局員（ペリシェを含む）は一九五七年の政治局員か一九七七年の政治局員かの別なく、いずれもスターリンの血の粛清のなかで党機関あるいは政府機関に奉職し、そして地方党書記や連邦閣僚といつたそれぞれの分野におけるエリートへと急速に成長していつた。無論、彼等は血の粛清の加害者でもないしまた被害者でもない。スターリンのテロリズムの実は恩恵者であつたというべきであろう。

もつとも、スターリンのテロリズムは一九四〇年八月のトロツキー暗殺で終つたわけではなく、戦後も、国家計画委員会議長兼政治局員ヴォズネセンスキー（Н. А. Вознесенский）などが粛清された一九四九年のレニングラード事件、民族主義的偏向を理由としてグルジアの党幹部が粛清された一九五一―五二年のミングレル事件あるいはまた党および軍の指導者の暗殺を企てたとして九名の高名な医者が逮捕された一九五三年の白衣の暗殺団事件といつたように繰り返えされているが、テロリズムの規模は戦前のそれと比較すると局地的であり部分的であつた。したがつて、一九七七年の政治局員の半数を占めるキーロフ事件以後の入党者は、キーロフ事件以前の入党者とは異なつて、スターリンのテロリズムの思わぬ恩恵に浴さなかつたかわりにはその犠牲を身近に見聞することもなかつたわけである。確かに、フルチョフの『秘密演説』はスターリンによる大量弾圧の事実を暴露し犠牲となつた「党のもつとも優れた活動家たち」の名誉を回復しているけれども、トロツキー、ブハーリン（Н. И. Бухарин）をはじめラデック（К. Б. Радек）、ラコフスキー（Х. Г. Раковский）、ピャタコフ（Г. Л. Пятаков）、トハチェフスキー（М. Н. Тухачевский）などの粛清については一言もふれていない。しかもまた、それはカラチャイ人などの少数民族に対するスターリンの抑圧にはわずかに言及しているが、農業集団化政策とその後に続く強権的なスターリン専制の下で一般大衆に強いられたもつとも大きな犠牲についてはまつたく沈黙を守つている。それにもかかわらず、

スターリン批判の『秘密演説』を党大会会場の異常な雰囲気のなかで聴く機会すらもち得なかつた政治局員が一九七七年の政治局には認められる。当時、ロシア共和国の農業次官であつたクラコフとレニングラードの「ジダーノフ」工場の党委員会書記であつたロマノフは党大会代議員にすら選ばれていなかつた。血の粛清もまた一九七七年の政治局においては、すでに色薄れはじめているといえよう。

さて、中央委員会の委員および委員候補は周知のように党大会で選出される。革命後はじめて開かれた党大会すなわち第七回党大会（一九一八年三月）選出の委員は一五名そして委員候補は八名であつたが、その後次第に増加し、戦後はじめて開かれた第一九回党大会（一九五二年一〇月）では委員一二五名と委員候補一一一名が選出されており、また第二〇回党大会（一九五六年二月）では一三三名と一二二名、第二二回党大会（一九六一年一〇月）では一七五名と一五五名、第二三回党大会（一九六六年四月）では一九五名と一六五名、第二四回党大会（一九七一年四月）では二四一名と一五五名、そして第二五回党大会では二八七名と一三九名がそれぞれ委員と委員候補として選出されている。したがつて、中央委員会の構成員数は改選のたびごとに増加してきているけれども、委員・委員候補の社会的構成はパターン化されており、ごく少数の労働者、農民（コルホーズ員）、生産現場の管理者以外の委員および委員候補はいずれもそれぞれの専門的な活動領域における指導的な党員つまりゲーレンのいう「個々の専門集団におけるエリート」[7]である。一九七七年の政治局では最年少の政治局員ロマノフがはじめて委員となつた第二三回党大会選出の中央委員会を例にとつてみると、まず党関係では中央委員会の党書記全員の一一名、中央委員会機関の部長一一名、共和国党第一書記全員の一四名、自治共和国（党組織上は州として扱われる）の党第一書記一四名、地方・州の党第一書記七三名、モスクワ市・レニングラード市・モスクワ市の区の党第一書記三名、共和国・モスクワ州・モスクワ市の党第二書記と党書記の一八名、政府関係では連邦の首相と副首相・閣僚・国家委員会議長の計六〇名と次官一一名、共和国政府の首相・閣僚の三〇名、連邦最高会議幹部会議長と共和国最高会議幹部会議長八名、軍総司令

官や軍管区司令官などの軍関係が三七名（ただし、七名は政府関係と重複）、大使一三名、モスクワ市などの地方ソヴェト執行委員会議長五名、『プラウダ』紙などの報道関係の一三名、コムソモール・労働組合・科学アカデミー・作家同盟などの代表と若干名の労働者・農民・工場長から構成されている。

このようにパターン化した社会的構成が常に可能であるためには、党大会代議員の手で選挙が行われる以前に、すでに委員・委員候補の候補者の選定が終つていなければならないはずであり、またその場合、委員あるいは委員候補たり得るポストがすでに特定されていれば、候補者の選定に煩わされることもあるまい。もちろん、このようなポストは、その主なものを除くと、中央委員会の構成員数の変動にともなつて幾分かは変化する。たとえば戦後の例を挙げていえば、タタール自治共和国の党第一書記は常に中央委員会委員に選ばれているが、北オセチン自治共和国の党第一書記は第二〇回党大会からは中央監査委員会委員、第二三回党大会からは中央委員会の委員候補に選ばれてはいるものの、委員となつたものはいない。このようにポスト自体がすでに資格づけられているわけである。では、そうしたポストへの人選はどのようにしてなされているかということが問題となろう。特に、党の指導機関の場合には党規約によると上から下まで選挙によるべきものとされている。

ソ連においては、党であれ政府であれあるいはまたそれ以外の社会団体であれすべての指導的なポストへの人選は特別登録者名簿（номенклатура）制の下に一元的に管理されている。それは、コルホーズの議長は無論のことコルホーズの作業班長（бригадир）ですらも対象としていることは知られているが、その実態となると明らかではないところが多い。しかし、ハラシミフ（Bondon Harashimiw）の研究[8]によると、連邦党中央委員会機関の部長、副部長、課長、課長代理、中央委員会インストラクター、州レヴェル以上の党組織の書記、共和国党中央委員会機関あるいは地方・州党委員会機関の部長、連邦の閣僚と次官およびソ連大使・公使、最高裁判所裁判官、共和国首相、検察・国家保安組織の州レヴェル以上の機関の長、軍司

令官、軍政治本部長、労働組合やコムソモールなどの指導者、中央紙の編集者、科学アカデミー総裁などはすべて第二級のカテゴリーに属するノメンクラトウラの対象であつて、このクラスのノメンクラトウラは書記局によつて作成されるという。第二級のノメンクラトウラがそのようなものであるとすると、中央委員会の委員あるいは委員候補たり得るようなポスト――それは党機関の指導的なポストのみとはかぎらない――への人選は、それが公選制であれ任命制であれそのいかんにかかわらず、実質的にはすべて書記局によつて決定されるということになる。書記局がこのような決定権を独占しているとなると、委員あるいは委員候補は中央委員会入りに先立つてその時の書記局とある種の結びつきつまり人的な繋りをなんらかのかたちでもつているとみて差支えなかろう。もちろん、この程度のレヴェルでは書記長個人との関係にまで発展している人的な繋りもあろうが、有力な党書記との結びつきもまた少なくないであろうと思われる。プラウディン（A. Pravdin）は、彼をある共和国党中央委員会の情報部長に推したその共和国の党第一書記がブレジネフ書記長の手引きでモスクワ入りして党書記になることを目論んだが、党書記キリレンコの反対に出会つて失敗した事例[9]を伝えている。

ところで、中央委員会入りの時点とははじめて中央委員会の構成員となつた時を指すわけであるが、中央委員会の構成員ではあつても委員候補には議決権が与えられていないし、また、第八表にみられるように委員候補を経て委員となつた政治局員はいわば例外的な存在でもあるので、はじめて委員に選出された時を中央委員会入りの時点としてみると、一九五七年の政治局では第一九回党大会以前に中央委員会入りした政治局員は一四名であるが、一九七七年の政治局では五名であつて、他の九名のうちの八名は第二〇回と第二二回党大会――一九五九年の第二一回党大会は臨時党大会のため中央委員会の改選は行われていない――で、また残りの一名が第二三回党大会で中央委員会入りしている。見る角度を幾分変えていえば、書記長となつて四年を経たフルシチョフの政治局では一五名中の一四名の政治局員がスターリン書記長の下で、また書記長となつて一三年を経たブレジネフの政治局ではロマノフを除いた一三名のうちの五名がスターリン書記長の下で、他の八名が

フルシチョフ書記長の下で、中央委員会の委員たり得るポストすなわちそれぞれの専門集団内部におけるエリートの地位を獲得している。したがつて、一九七七年の政治局にはフルシチョフ書記長の影ばかりでなく、スターリン書記長の影すらもなお色濃く残つているともいえよう。しかし、中央委員会の委員となることと政治局の構成員となることとは、指摘するまでもなく同列には扱えない。たとえ、政治局員候補となるにせよ政治局入りするということは書記長との直接的な結びつきを意味しているが、結びつきにも濃淡があろう。そこでひとまず、政治局入りした当時の書記長と現実の書記長が異なる場合その政治局員を現実の書記長との関係においては「協力者」(joiners)としてとらえ、また政治局入りした当時の書記長と現実の書記長が一致する場合その政治局員を現実の書記長との関係においては「被保護者」(creatures)としてとらえてみよう。

このような観点に立つと、ヴォロシロフ、ミコヤン、ブルガーニンの三名はフルシチョフの「協力者」以外のなにものでもないということになろう。彼等はスターリンの手で政治局入りしているからである。では他の一一名、差当つてはシヴェルニク、クーシネン、アリストフ、ブレジネフ、イグナトフ、ススロフ、キリチェンコについてはどうであろうか。実は、キリチェンコを除く前記の六名は一九五七年六月二二日から二九日にかけて開かれた中央委総会ではじめて政治局員入りしたわけではなかつた。シヴェルニクは全連邦労働組合中央評議会第一書記であつた一九三九年に政治局員候補となり、その後ロシア共和国最高会議幹部会議長兼連邦最高会議幹部会副議長を経て四六年三月連邦最高会議幹部会議長に就任、五二年一〇月一六日の中央委総会――一〇月総会で政治局員に昇格したが、翌五三年三月七日の中央委総会――三月総会で政治局員候補に格下げされ、ついで三月一五日には連邦最高会議幹部会議長を解任されて全連邦労働組合中央評議会議長のポストをあてがわれていた。コミンテルンの執行委員会書記を勤めていたクーシネンは一九四〇年三月カレロ・フイン共和国の成立とともにその最高会議幹部会議長兼連邦最高会議幹部会副議長に就任し、五二年の一〇月総会で政治局員に選出されたが、翌

年の三月総会では再選されていない。また、アリストフもチェリヤビンスク州党第一書記から一九五二年の一〇月総会で党書記兼政治局員に選出されたが、翌年の三月総会では再選されず、ハバロフスク地方ソヴェト執行委員会議長に左遷されたが、五四年にハバロフスク地方党第一書記となり、五五年七月の中央委総会で党書記（兼中央委員会ロシア共和国ビューロー委員）に選ばれていた。一九五〇年にモルダヴィア党第一書記となつたブレジネフとクラスノダール地方党第一書記のイグナトフはともに五二年の一〇月総会で党書記兼政治局員候補に選出されたが、翌年の三月総会で党書記兼政治局員候補のポストを失い、ブレジネフは海軍政治本部長に、イグナトフはレニングラード市党第一書記兼レニングラード州党第二書記にいわば左遷された。その後ブルジネフはカザフの党第二書記ついで党第一書記となり、五六年二月の中央委総会で党書記兼政治局員候補に選出されている。

それ故に、一九五六年二月の中央委総会におけるブレジネフの政治局員候補への選出も、また翌五七年六月の中央委総会におけるシヴェルニク政治局員候補の政治局員への格上げ、クーシネン、アリストフ、イグナトフの政治局員への登用も彼等にとつては実は返り咲きであつたということになる。彼等は、一九五二年の一〇月総会選出の政治局が政治局員二五名（局員候補一一名）といつたように異常に大きな規模であつたとはいえ、ともかくもその構成員であつた。スターリン時代においてすでに党中央あるいは連邦政府の枢要な地位にあつたわけであり、したがつて彼等は、ミコヤンのような古参の「協力者」とは比ぶべくもないが、一応フルシチョフの「協力者」ということになろう。無論、ススロフもこのような「協力者」のなかに入れなければならない。彼は、フルシチョフがウクライナの党第一書記を経て一九四九年二月に党書記兼モスクワ州党第一書記となつて党中央に復帰したそれ以前に、すなわち四六年の三月に組織局員（一九五二年に組織局はその機能を書記局に移して解消した）、四七年二月には党書記に、そして五二年の一〇月総会では政治局員に選ばれたが、翌年の三月総会で政治局の規模の縮小にともなつて政治局からはずされ、党書記に専念していたが、五五年七月の中央委総会で再び政治局員に選

ばれているからである。

しかしながら、一九五五年七月ススロフとともに政治局員となつたキリチェンコはススロフのようにスターリン時代にすでに確固とした地位を党内において築いていたわけではない。一九四一年二月にウクライナ党書記となり、第二次大戦中は南西方面軍軍事会議のメンバーとして活動し、四四年一月再びウクライナ党書記に選出され、四五年七月から四九年一二月まではオデッサ州党第一書記にその後ウクライナ党第二書記となり、五三年五月の中央委総会で政治局員候補に、そして翌六月にウクライナ党第一書記に登用された。スターリンの死（一九五三年三月五日）後のフルシチョフ書記長の下――スターリン死亡の翌日マレンコフが党第一書記兼首相となつたが、わずか九日間で党第一書記の座をおり、フルシチョフが筆頭書記となり、同年の九月からは党第一書記に就任した――ではじめて党中央に進出した政治局員には、キリチェンコの外にベリヤエフ、コズロフ、フルツェワ、ムヒトディノフが挙げられる。ベリヤエフはアルタイ地方ソヴェト執行委員会議長から一九四五年にこの地方（クライ）の党第一書記に、五五年七月に党書記となり、そして翌五六年四月には中央委員会ロシア共和国ビューロー副議長を兼ねた。コズロフは一九四〇年にイジェフスク市党書記となり、その後中央委員会機関に勤務し、クイブィシェフ州党第二書記、レニングラード市の「キーロフ」冶金工場の党オルグを経て、レニングラード市の党第一書記に、五二年にはレニングラード州の党第二書記、翌年には党第一書記に昇格、ついでロシア共和国首相に登用された。フルツェワは一九四二年にモスクワ市フルンゼ区の党書記となり、五〇年にモスクワ市の党第二書記、五四年に党第一書記となり、五六年二月の中央委総会で党書記に選出されており、ムヒトディノフは四七年にウズベクのナマンガン州の党書記、党第一書記、ついでウズベクの党書記、タシケント州党第一書記を経て五一年にウズベク首相に就任、五五年から五七年にかけてウズベク党第一書記、五七年一二月の中央委総会で党書記兼政治局員に選出されている。それ故に、政治局入りの時点に重きをおいてフルシチョフとの関係を想定すると、前記した五名の政治局員はフルシチョフの「被保護者」であるということになろう。

さて、前述のように、政治局入りの時点を判定の主たる基準として一九五七年の政治局をフルシチョフ書記長とともに構成した一四名の政治局員を、フルシチョフの「協力者」とフルシチョフの「被保護者」とに二分したわけであるが、少なくともこの政治局つまり一九五七年一二月三一日現在の政治局に関するかぎり、事実、「協力者」も「被保護者」もともにフルチョフを積極的に支持しまた彼に協力して政策決定の責任を分ちあつていた。すなわち、スターリンの死後はじめて開催された一九五六年二月の第二〇回党大会選出の中央委員会の総会では、ブルガーニン首相、ヴォロシロフ連邦最高会議幹部会議長、カガノヴィチ（Л. М. Каганович）第一副首相、キリチェンコ・ウクライナ党第一書記、マレンコフ副首相兼発電所大臣、ミコヤン第一副首相、モロトフ（В. М. Молотов）第一副首相兼国家統制大臣、ペルヴーヒン（М. Г. Первухин）第一副首相、サブーロフ（М. З. Сабуров）第一副首相兼国家経済委員会議長、ススロフ党書記、フルシチョフ書記長の合計一一名の政治局員と、ジューコフ（Г. К. Жуков）国防大臣、ブレジネフ党書記、ムヒトディノフ・ウズベク党第一書記、シェピーロフ（Д. Т. Шепилов）党書記、フルツェワ党書記、シヴェルニク党統制委員会議長の合計六名の政治局員候補からなる政治局が選出された（その後一二月の中央委総会でシェピーロフは党書記を解任されたが、翌年二月の中央委総会で再び党書記に就任し、またレニングラード州党第一書記のコズロフが政治局員候補に選ばれている）。しかし、この政治局の人的構成はスターリンを失つた指導者集団内部の権力闘争の一時的妥協の所産であつて、対立は一九五七年の六月に表面化した。マレンコフやモロトフなどの反フルシチョフ派が政治局の会議の席上でフルシチョフの退陣をせまつた。しかし、その決着が中央委員会の総会にもちこされたために反フルシチョフ派は敗れ、彼等は反党グループと名づけられて追われた。すなわち、六月二二―二九日の中央委総会で、マレンコフ、モロトフ、カガノヴィチ、サブーロフの四名は政治局員を、シェピーロフは政治局員候補を解任され、またペルヴーヒンは政治局員候補に格下げされた。しかもまた、マレンコフ、モロトフ、カガノヴィチ、シェピーロフの四名は中央委員会からも追われ、政府の要職からはずされた。そして、政治局員を解任された四名と政治局員候補

に格下げられた一名にかわつて、政治局員候補であつた党書記のブレジネフとフルツェワ、レニングラード州党第一書記のコズロフ、党統制委員会議長のシヴェルニク、国防大臣のジューコフの五名が政治局員に昇格し、アリストフ党書記、ベリヤエフ党書記兼中央委員会ロシア共和国ビューロー副議長、イグナトフ中央委員会ロシア共和国ビューロー委員、クーシネン連邦最高会議幹部会副議長の四名が政治局員に選ばれ、また政治局員候補にはコスイギン・ゴスプラン第一副議長、キリレンコ・スヴェルドロフ州党第一書記兼中央委員会ロシヤ共和国ビューロー委員、マズロフ白ロシア党第一書記、ムジャワナッゼ（В. П. Мжаванадзе）グルジア党第一書記、ラトヴィア党第一書記のカルンベルジン（Я. Э. Калнберзин）、ウクライナ共和国最高会議幹部会議長のコロトチェンコ（Д. С. Коротченко）、中央委員会付属マルクス・エンゲルス・レーニン主義研究所長のポスペロフ（П. Н. Поспелов）の七名が新たに選出されて計九名となつた。その後、一〇月の中央委総会でジューコフが政治局員を解任され、一二月の中央委総会でムヒトディノフが党書記に選ばれると同時に政治局員に格上げされて成立した政治局が本稿で取り上げている一九五七年の政治局である。すなわち、この政治局は反フルシチョフ派との対決のなかで形成されたフルシチョフ派のメンバーによつて構成された。

しかしながら、「協力者」であるからといつて常に協力を誓つているわけではないし、また「被保護者」であるからといつていつまでも被保護の立場に甘んじているとはかぎらない。「協力者」が時には批判者あるいは対立者になることも稀ではないし、「被保護者」がいつのまにか力をつけて協力提供者となりあるいはまた批判者ともなることも充分にあり得る。たとえば、スターリンの「被保護者」そしてフルシチョフの「協力者」であつたブレジネフは一九五七年六月にはフルシチョフを支持したが、一九六四年一〇月にはフルシチョフの追い落しに重要な役割を果している。したがつて書記長と「協力者」あるいは「被保護者」との関係は、たとえば政策上の意見の不一致や対立あるいはまた他の政治局員との繋りといつたようなその具体的な展開のなかで常に検討しなおされなければならないが、「協力者」と「被保護者」という政治局入りの

時点を主たる基準とした二分化方式は、外界から隠された政治局内部の力関係をさぐる最も有効な手掛りである。

このような観点から、ブレジネフ書記長とともに一九七七年の政治局を構成している一三名の政治局員を取り上げてみると、ススロフ、コスイギン、キリレンコ、マズロフはブレジネフの「協力者」ということに、そしてクラコフ、ウスチノフ、ロマノフはブレジネフの「被保護者」ということになろう。では、他の六名についてはどうであろうか。彼等は第八表にみられるようにいずれもブレジネフの下で政治局員となつているけれども、まずグリシン、ペリシェ、アンドロポフをクラコフやウスチノフなどと同列にあつかうことはできない。というのは、グリシンはソ連労働組合中央評議会議長として一九六一年に政治局員候補となつており、ペリシェは党歴や現職の専任ポストからしても一九五七年の政治局におけるシヴェルニクと似た存在であり、またアンドロポフは一九六二年にフルシチョフ書記長の下で、いいかえるとブレジネフが書記局に二度目の返り咲きをする以前にすでに党書記となつているからである。したがつて、この三名は「協力者」と「被保護」の中間にあるが一応「協力者」のなかに加えるべきであろう。つぎにクナエフ、シチェルビツキー、グロムイコであるが、彼等はいずれも政治局員となつたのは比較的遅い。クナエフは政治局入りする前にすでに共和国の首相と党第一書記の在任経験をつんでおり、シチェルビツキーは共和国の首相在任中に政治局員候補に選ばれている。すなわち、この二名はいずれも政治局入り以前に共和国の党あるいは政府の最高指導者とはなつているが、党中央あるいは連邦政府のポストに就任したことはない。またグロムイコは次官や閣僚の経験は豊かであつても、それ以上のポストにあつたことはない。したがつて、この三名もまた「協力者」と「被保護者」の中間にあるが、一応「被保護者」のなかに加えられるべきであろう。すなわち、一九七七年の政治局については、ススロフ、コスイギン、キリレンコ、マズロフ、グリシン、ペリシェ、アンドロポフの七名が「協力者」クナエフ、シチェルビツキー、グロムイコ、クラコフ、ウスチノフ、ロマノフの六名が「被保護者」ということになる。そして、この二分化方式から単純な予測をすると、ブレジネフの批判者あるいは対立者が生れるとすれば、それは七名の「協

第八表　政治局員の党歴

	入党年	入党年齢	中央委員会入の時点 委員候補	中央委員会入の時点 委員	政治局入りの時点 政治局員候補	政治局入りの時点 政治局員
1957年の政治局						
アリストフ	1921	17–18		1952		1957
ベリヤエフ	1921	17–18		1952		1957
ブレジネフ	1931	24–25		1952	1956	1957
ブルガーニン	1917	21–22	1934	1939	1946	1948
ヴォロシロフ	1903	22		1921		1926
イグナトフ	1924	22–23		1952		1957
キリチェンコ	1930	21–22		1952	1953	1955
コズロフ	1926	17–18		1952	1957(2)	1957(6)※
クーシネン	1904	22–23		1941		1957
ミコヤン	1915	20	1922	1923	1926	1935
ムヒトディノフ	1942	24–25		1952	1956	1957
ススロフ	1921	18–19		1941		1955
フルツエワ	1930	19–20	1952	1956	1956	1957
フルシチョフ	1918	24		1934	1938	1939
シヴェルニク	1905	16–17		1925	1953	1957
1977年の政治局						
ブレジネフ	1931	24–25		1952	1956	1957
アンドロポフ	1939	24–25		1961	1967	1973
グリシン	1939	24–25		1952	1961	1971
グロムイコ	1931	21–22	1952	1956		1973
キリレンコ	1931	24–25		1956	1957–61	1962
コスイギン	1927	22–23		1939	1957	1960
クラコフ	1940	21–22		1961		1971
クナエフ	1939	26–27		1956	1966	1971
マズロフ	1940	25–26		1956	1957	1965
ペリシェ	1915	15–16		1961		1966
ロマノフ	1944	20–21		1966	1973	1976
ススロフ	1921	18–19		1941		1955
ウスチノフ	1927	18–19		1952	1965	1976
シチェルビツキー	1941	22–23		1961	1965	1971

※括弧内の数字は月を示す。

力者」のなかから現われるであろう。

(1) История Всесоюзной Коммунистической Партии (большевиков), краткий курс, Москва, 1938, с. 311.
(2) „Khrushchev's Secret Report" (Bertram D. Wolfe, *Khrushchev and Stalin's Ghost*, London, 1957), p. 130.
(3) "Khrushchv's Socret Roport" (*ibid.*), p. 128.
(4) "Khrushchev's Secret Roport" (*ibid.*), p. 124.
(5) 拙稿「ソ連共産党、そのエリートの所属民族」(『法学研究』第四八巻、第一〇号) に記載した第四表参照。
(6) "Khrushchev's Secret Report" (*op.cit.*), p. 152.
(7) M. P. Gehlen, *The Communist Party of the Sovit Union* (Bloomington, 1969), p. 40.
(8) Bondan Harasymiw, "Nomenklatura: The Soviet Communist Party's Leadership Recruitment System", *Canadian Journal of Political Science*, vol. II, No. 4 (December 1969), p. 493.
(9) A. Pravdin and Mervyn Matthews, "An Interview with a CPSU Functionary", *Survey*, vol. 20, No. 4 (Autumn 1974), p. 94.

四　政治局員の指導経験

一九五七年の政治局員と一九七七年の政治局員が政治局員という党の階層的な組織の頂点にあるポストにたどりつくまでのその過程を、学歴とか入党や中央委員会入りの時点といったような幾つかの指標をおいて観察した。それぞれの過程が多様でもあることを繰り返えして述べる必要はないが、個々の政治局員が政治局入り前にすでに蓄積しまた政治局員として蓄積してきた経験特に政治的経験を、それが相互に比較可能のようなかたちで整理することはできないものであろうか。もし、それが可能であれば、政治局員相互の比較ばかりでなく、政治局員の経歴からみた一九五七年の政治局と一九七七年の政治局との比較もまた可能となろう。第九表と第一〇表は、このような意図から作成されたものである。(1) すなわち、第九表は、一九五七年の政治局と一九七七年の政治局をそれぞれ構成している政治局員の党・政府・労働組合・コムソモールといった分野別の指導経験年数を個別に示しており、また一九五七年の政治局と一九七七年の政治局についての分野別の指導経験者の

数（構成比率）と、それぞれの政治局における平均的政治局員の分野別の指導経験年数――「指導経験年数」を示したものが第一〇表である。

一九五七年の政治局と一九七七年の政治局とを、まず党指導経験者の構成比率ならびに「党指導経験年数」について比較対照してみると、第一〇表にみられるように、党指導経験者の構成比率では注目しなければならないほどの差異は認められないが、「党指導経験年数」では、一九五七年の政治局の一三・五年に対して一九七七年の政治局では二一・七年と実に八・一年もの差がある。もつとも、政治局員の平均年齢が一九五七年の政治局では五八歳であつて一九七七年の政治局では六七歳であるから、年齢の上でも九年の差があるが、後述のように「政府指導経験年数」でも一九七七年の政治局では六・二年も長くなつているので、「党指導経験年数」の差についてはその内容が改めて問題とされるべきであろう。

さて、「党指導経験年数」にみられる一九五七年の政治局と一九七七年の政治局との著しい差であるが、その一部は「地方党第一書記経験年数」の差でもある。すなわち、一九七七年の政治局では、「地方党第一書記経験年数」が一・三年ほどいいかえると「地方党書記経験年数」が二・二年ほど長くなつており、またそれだけに地方の党書記経験が一九五七年の政治局よりも尊重されているということになろう。とはいえ、八・一年という「党指導経験年数」にみられる差の大部分をなすものは「党書記経験年数」の差である。一九五七年の政治局の一・九年に対して一九七七年の政治局では七・四年となつており、したがつて一九五七年の政治局と比較すると地方党書記経験がより尊重されているということよりもむしろ中央の「党書記経験」こそがより一層重視されているというところに一九七七年の政治局の特徴がみられる。しかし、第九表と第一〇表の「党書記」のカテゴリーには書記局の構成員以外に党統制委員会議長と中央委員会ロシア共和国ビューロー副議長――議長は書記長が兼任した――を加えている。したがつて書記局の構成員つまり党書記のみにかぎつた場合には、一九五七年の政治局と一九七七年の政治局とにはどのような差異が認められるであろうか。まず、一九五七年の政治局では党書記経験

者が一〇名しかもこの一〇名全員が現職の党書記であつて、そのうちの八名は経験年数二年以下である。ムヒトディノフの場合には一ヵ月にも満たない。一九七七年の政治局では党書記経験者が六名であつてそのうちの四名が現職の党書記でありいずれも経験年数は一一年以上である（第一〇表参照）。しかも、一九七七年の政治局のその四名の現党書記は政治局員を兼ねつつ党書記経験を豊かにしている。党書記兼政治局員としての在任年数はススロフが三二年、ブレジネフが一七年、キリレンコが一一年、そしてクラコフですらすでに六年をこえている。したがつて、党書記の経験者数と経験年数の点では、第一〇表に現われているそれ以上の格差が一九五七年の政治局と一九七七年の政治局の間にはあるということになる。したがつて、一九五七年の政治局と比べると一九七七年の政治局では前述したように地方党書記の経験が尊重されてはいるが、実はそれ以上に中央党書記の経験が重視されているといわなければならない。

つぎに、「政府指導経験者」――連邦最高会議幹部会議長、連邦の次官以上のポストあるいは共和国首相の在任経験者の数と「政府指導経験年数」、および「閣僚経験者」――軍と治安警察関係を除く連邦の次官以上のポストの在任経験者の数と「閣僚経験年数」についてであるが、まず、「政府指導経験者」が一九五七年の政治局では全政治局員の半数以下であるのに対して一九七七年の政治局では三分の二をこえていること、また「政府指導経験年数」は五・五年から一一・七年へと倍増しており「閣僚経験年数」も四・一年から七・五年へと二倍近くにものびていることに注目されよう。一九五一年の政治局では政治局員一一名全員が「政府指導経験者」でありまた一〇名（九一パーセント）が「閣僚経験者」であつて、「政府指導経験年数」は一三・五年また「閣僚経験年数」も一二・九年であつた。この点からみると、一九七七年の政治局は一九五一年の政治局に似た性格をもつということになる。しかし、それぞれの政治局における「政府指導経験年数」と「閣僚経験年数」との開きについては、それが一九五一年の政治局ではわずか〇・九年であつたが、一九五七年の政治局では一・四年に、一九七七年の政治局では四・二年へと拡大している。もちろん、この開きは主として共和国首相の在任経験年数を意味して

いるのであるから、この点からすると一九七七年の政治局は一九五七年の政治局よりも、地方党書記の経験——地方の党指導経験が尊重されていると同じように、共和国首相の経験——地方の行政指導経験が尊重されているということになる。とはいえ、一九七七年の政治局では連邦政府の指導経験が軽視されているというわけではまつたくないのであつて、中央の党書記経験の重視がこの政治局の特徴であると同時に、連邦政府つまり中央の行政指導経験の重視がまたこの政治局つまり一九七七年の政治局の特徴となつている。

一九五七年の政治局にも一九七七年の政治局にも全連邦労働組合中央評議会議長の経歴をもつ政治局員がそれぞれ一人ずつ認められる。すなわち、「労組指導経験者」は同数であるが、労働組合とのかかわり方となると、両者は大きく異なつている。シヴェルニクはすでに革命前から労働運動に参加しておりまた労働組合の指導者として党内における確固とした地位を築いていつたが、中央評議会議長就任以前のグリシンには、労働組合の指導経験はまつたくない。グリシンの後をついで中央評議会議長となつたシェレピン（А. Н. Шелепин）もまたその点では同様である。すなわち、「労組指導経験年数」は一九七七年の政治局において幾分のびているけれども、党中央への進出には労働組合指導の経験は次第に尊重されなくなつている。

コムソモール（Комсомол）——正しくは全連邦レーニン主義共産青年同盟（Всесоюзный Ленинский Коммунистический Союз Молодежи）における指導の経験者は比較的多く、また指導経験年数の長い政治局員もいなくはない。一九五七年の政治局のフルツェワ、一九七七年の政治局のアンドロポフとマズロフはいずれも共和国・州レヴェルの指導者を勤め、そうしたコムソモールにおける指導活動の実績によつて党内で比較的高いポストを獲得しているが、高等専門教育を受けテクノクラートとして出発した政治局員は、一般にコムソモール指導経験に乏しいかあるいはそのような経験をもちあわせていない。

さて、軍関係の指導経験者であるが、一九五七年の政治局でも一九七七年の政治局でも半数以上の政治局員が軍関係の指導的ポストにあつた経験をもちあわせている。もつとも、指導的ポストとなると、それは国防会議の議長および委員、国防大臣、国防次官、軍事会議の議長および委員、軍の政治部長、方面軍司令官、パルチザン活動指導者などと多様であるが、一九七七年の政治局には、ウクライナ戦線の前線指揮官であつたヴォロシロフや東部・南部戦線で政治委員を勤めたシヴェルニクのような内戦時代の軍指導者はペリシェを除くと見当らない。ペリシェにしても公けにされている経歴には「赤軍のなかで党活動に従事」としか記されていないのであつて、さほど責任のあるポストにあつたとは思われない。すなわち、一九七七年の政治局ではペリシェを除く八名の軍指導の経験者はいずれも第二次大戦中に、しかも主として前線もしくは戦線で軍指導の経験をつんでいる。たとえば、ブレジネフは南部方面軍政治部長や第四ウクライナ方面軍政治部長などを、スロフは外コーカサス方面軍軍事会議委員やスターヴロポリ地方パルチザン参謀長を、キリレンコは南部戦線第一八軍の軍事会議委員を勤めており、マズロフは白ロシアでパルチザン活動を指導した。しかも、一九七七年の政治局ではブレジネフ書記長が現に国防会議の議長を勤め、またウスチノフが国防大臣のポストにあるが、「軍指導経験年数」が一九五七年の政治局よりも〇・九年とわずかではあるが短くなつているということは、それだけ、一九七七年の政治局では専門的な軍指導者との私的な繋りが薄れてきていることを意味してはいないのだろうか。

治安警察関係の指導経験者は一九五七年の政治局に三名、一九七七年の政治局に二名みられるが、現連邦国家保安委員会議長のアンドロポフを除いてはいずれも指導者として高いポストにあつたとは思われない。イグナトフは入党前の一九一七年から、ブルガーニンは入党後間もない一九一八年からそれぞれ若いチェキスト（чекист）として活動していたようであり、またペリシェについては判然としない。

つぎに、企業の経営管理経験であるが、この種の経験をもつ政治局員の数は一九五七年の政治局の四名から一九七七年の

第九表　政治局員の分野別指導経験年数

	党				政府		労組	コムソモール	軍	治安警察	管理経験	労働経験
	指導経験年数の合計	地方党第一書記	中央委機関	党書記	指導経験年数の合計	閣僚						
1957年の政治局員												
アリストフ	15	8		2				2				9
ベリヤエフ	15	10		2				3			15	
ブレジネフ	14	8	1	2	1				5		3	6
ブルガーニン					20	19			10	4	8	
ヴォロシロフ					17	12			32	1–		15
イグナトフ	20	8		1						?		3
キリチェンコ	16	8						3	4			10
コズロフ	17	4	4					2			?	3
クーシネン												
ミコヤン	6	3			31	31			1			
ムヒトディノフ	6	5			4							?
ススロフ	26	5	3	10	(6)			2	4			?
フルツェワ	15	3		1				7				?
フルシチョフ	30	18		8	3				5			11
シヴェルニク	22			2	7		3		2			3
1977年の政治局員												
ブレジネフ	30	8	1	19	5				18		3	6
アンドロポハ	19		7	5	14			8		10		?
グリシン	25	10					11		2		4	
グロムイコ					31	31						
キリレンコ	36	15		15	1–			1	1–		4	4
コスイギン	1–				39	38			2		9	?
クラコフ	20	4	1	12	5			1			3	
クナエフ	15	15			17						5	1–
マズロフ	16	12			18	12		7	4			
ペリシェ	42	7		11					10	?		5
ロマノフ	20	7										2
ススロフ	46	5	3	30	(6)			2	4			?
ウスチノフ	11			11	25	24			1			2
シチェルビッキー	22	9			9			1	4		1	

第一〇表

	分野別の指導経験の数とその構成比率（表示は百分率）		各政治局における平均的政治局員の分野別指導経験年数	
	1957年の政治局	1977年の政治局	1957年の政治局	1977年の政治局
党指導経験者	13 (87)	13 (93)	13.5	21.6

地方党第一書記	11 (73)	10 (71)	5.3	6.6
中央委機関	3 (20)	4 (29)	0.5	0.9
党書記	8 (53)	7 (50)	1.9	7.4
政府指導経験者	7 (47)	10 (71)	5.5	11.7
閣僚	3 (20)	4 (29)	4.1	7.5
労組	1 (7)	1 (7)	0.2	0.8
コムソモール	6 (40)	6 (43)	1.3	1.4
軍	8 (53)	9 (64)	4.2	3.3
治安警察	3 (20)	2 (14)	0.3	0.7
管理経験	4 (27)	8 (57)	1.7	2.3
労働経験	11 (73)	9 (64)	4.0	1.4

第一一表　政治局員の政治局員在任年数と党書記経験年数

1957年の政治局	政治局員在任年数	党書記経験年数	1977年の政治局	政治局員在任年数	党書記経験年数
アリストフ	1-	2	ブレジネフ	20	19
ベリヤエフ		2	アンドロポフ	4	5
ブレジネフ		2	グリシン	6	
ブルガーニン	9		グロムイコ	4	
ヴォロシロフ	32		キリレンコ	15	11
イグナトフ			コスイギン	21	
キリチェンコ	2		クラコフ	6	12
コズロフ			クナエフ	6	
クーシネン	1-		マズロフ	12	
ミコヤン	12		ペリシェ	11	
ムヒトディノフ			ロマノフ	1	
ススロフ	2	10	ススロフ	22	30
フルツェフ		1	ウスチノフ	1	11
フルシチョフ	18	8	シチェルビツキー	6	
シヴェルニク	1-				

第一二表　政治局員の年齢構成

	1951年の政治局	1957年の政治局	1971年の政治局	1977年の政治局
50才未満	2	4	—	—
50才以上59才以下	6	5	7	3
60才以上69才以下	1	4	7	6
70才以上	2	2	1	5

政治局の八名へと倍増しており、また「管理経験年数」も第一〇表にみられるように伸長しているけれども、「管理経験者」の構成比率ほどには「管理経験年数」がのびていないということは、企業の経営管理経験は次第に尊重されてきてはいるものの、その時間的な豊かさは政治局員になる上ではそれほど評価されていないということを示していよう。なお、労働者あるいは農民の経験すなわち労働経験については、学歴や前述した「管理経験年数」の伸長からも予想されるように、労働経験者の数も「労働経験年数」もともに一九七七年の政治局では低下している。

最後に、政治局員の政治局員としての在任年数と年齢にふれてみたい。政治局員としての平均在任年数は、第一一表から明らかなように、一九五七年の政治局では五・二年、一九七七年の政治局では九・六年である。前者には在任二〇年以上の政治局員は一名であるが、後者には三名も認められる。したがつてまた、一九七七年の政治局員は年齢的にも高い。カトリック教会では枢機卿の隠退年齢を七〇歳と定めている[2]そうであるが、一九七七年の政治局では、ペリシェ、ススロフ、コスイギン、キリレンコ、ブレジネフの五名が枢機卿の隠退年齢をすでにこえている。

(1) 指導経験の分類と数量化の基準はリグビーの採つているそれと合せた。Cf., T. H. Rigby, "The Soviet Politburo: A Comparative Profile 1951-71", *Soviet Studies*, vol. XXIV, No. 1 (July 1972) pp. 16-7. 本稿が取り上げている一九五七年の政治局・一九七七年の政治局と彼が対象とした一九五一年の政治局・一九七七年の政治局との比較を可能にするためでもある。ただし、彼の作成した「第五表」と「第六表」には若干の計算違いがある。たとえば、シェレピンには労組指導経験は無いと計算されているが、シェレピンは一九六七年七月に全ソ労組中央評議会議長に就任しているので、当然、労組指導経験は四年と数えなければならないはずである。なお、指導経験の分類基準つまり本論の「第九表」と「第一〇表」の主な項目について記すと、「地方党第一書記」とは州・地方・共和国の党第一書記（モスクワ市党第一書記を含む）を、「中央委機関」とは党書記以外のこの機関の指導的ポストを示す。また、経験年数一年未満は切り捨てており、ほぼ一年と数えられる場合にのみ「1-」と表示した。

(2) Rein Taagepera and Robert Dale Chapman, "A Note on the Ageing of the Politburo", *Soviet Studies*, vol. XXIX, No. 2 (April 1977), p. 296.

むすび

以上においては、経歴つまりハード・データをつかつて政治局員のプロフィールを描きあげるとともに、蓄積された彼等の政治的経験を類別し数量化して一九五七年の政治局と一九七七年の政治局との比較を試みた。その結果明らかなことは、学歴、青年時代の生活経験や社会体験あるいはまたスターリンのテロリズムとのかかわり合いなどについても、一九五七年の政治局と一九七七年の政治局とには差異がみられるということである。これらの差異は、集約していえば、一九五七年の政治局では既存の体制の変革に献身した「革命の父」が全政治局員の三分の一近くを占めていたのに対して、一九七七年の政治局では新しい体制の下で育成されたいわゆる「革命の子」が支配しているというところから発している。

しかし、一九五七年の政治局と一九七七年の政治局に共通してみられる点がないわけでもない。両者のいずれにおいても書記長は全政治局員の過半数以上を占める党書記をともなつており、この点では一九五一年のスターリンの政治局とは対照的である。しかし、一九五七年の政治局では政治局員を兼ねる党書記特に中央委員会書記の数に重きがおかれたために、党書記経験の質と量が軽視され行政経験の質と量もないがしろにされたが、一九七七年の政治局では行政経験の質と量が尊重され党書記経験の質と量も重視されたために、政治局員を兼ねる党書記特に中央委員会書記の数が軽んじられている。それ故、一九五七年のフルシチョフの政治局では改革的なあるいは飛躍した政策の決定への抵抗は少なかろうが、政策効果や行政効率への配慮にかけ、ひいては政治局員を兼ねている党書記の造反を招くであろうような危険が内在していたが、一九七七年のブレフジネフの政治局では政策効果や行政効率への配慮の行き届いた政策の決定は保証されるであろうが、政治局員を兼ねている党書記特に中央委員会書記に対する書記長の掌握力に問題が残つている。